

夏吉古墳群・清瀬横穴群 伊田狐塚横穴群

福岡県田川市夏吉・伊田所在古墳・横穴群の調査

田川市文化財調査報告書

第 2 集

1983

田川市教育委員会

序

この報告書は、夏吉秋里の農地改良区域に所在した夏吉4号墳と、夏吉清瀬及び上伊田東地区の土採り工事中に発見された横穴群の発掘調査の記録です。

市民の文化財保護への理解と気運が高まっているとき、この報告書が古代史研究の一資料として大いに活用され文化の向上に役立つとともに、次々と失われていく埋蔵文化財保存への契機となれば幸いであります。

これらの遺跡より出土した遺物は、本年3月開館した石炭資料館の歴史民俗資料展示室に展示し、資料館をさらに充実したものにしていきたいと思ひます。

この調査にあたりご尽力いただいた県文化課職員をはじめ関係者各位のご理解とご協力に対し、深く感謝の意を表します。

昭和58年3月31日

田川市教育委員会

教育長 角 銅 圓

I. 調査の経過

本調査は、田川市大字夏吉に所在する夏吉4号墳と清瀬横穴群が農業構造改良事業にかかり、夏吉4号墳は水田の中の古墳であるために除去され、清瀬横穴群は客土用土取りのために削平されるに伴った緊急調査である。

一方、田川市大字伊田に所在する狐塚横穴群では、土取工事現場で横穴群が発見されたために応急的な緊急調査を行ったので、三者を合せて報告する。

調査は、伊田狐塚横穴群が昭和57年4月2日から4月17日まで、清瀬横穴群が5月6日から5月19日まで、夏吉4号墳が5月18日から6月10日まで実施した。なお、清瀬横穴群は、土取工事の始った際の昭和56年9月7・8日にも応急的な調査をしたので、この時調査した3基も今回の報告に含めている。

また、調査は、伊田狐塚横穴群を柳田・木下・伊崎、清瀬横穴群を柳田・川述・伊崎・日野、夏吉4号墳を柳田・木下・伊崎・日野が担当した。

調査関係者は下記のとおりである。

調査責任者	田川市教育委員会	教 育 長	角 銅 圓
	同	教 育 次 長	原 品 造
	同	社会教育課長	酒 井 一 雄
	同	社会教育係長	太 田 拓 哉
	同	社会教育係主任	田 原 孝 雄
調査担当者	田川市教育委員会	嘱 託	日 野 孝 司
	福岡県教育庁文化課	技 術 主 査	柳 田 康 雄
	同	主 任 技 師	川 述 昭 人
	同	同	木 下 修
	同	技 師	伊 崎 俊 秋

このほかに、仲村信治・池田幸隆・金子包喜・武田忠夫・笹山良孝・原宗一・笹山高雄の諸氏は土地所有者としてや作業員の手配でご協力いただいた。さらに桂川町教育委員会の長谷川清之氏や県立田川東高校の安藤龍生先生と同校考古学クラブの生徒諸君も発掘作業に参加されたことを感謝します。

(柳 田)

II. 位置と環境

本報告書は、福岡県田川市内に所在する3群の遺跡を掲載するが、その第1は大字夏吉字カ



第1圖 周辺遺跡分布地図(1/25,000)

ネヒラに所在する夏吉4号墳、第2は大字夏吉字清瀬に所在する清瀬横穴群、第3は大字伊田字狐塚に所在する伊田狐塚横穴群である。

この3群の遺跡は、彦山川が形成する田川盆地の右岸に立地するが、田川盆地は彦山川の支流である金辺川・中元寺川の浸食によって湾入し、横穴群の立地に適した地形となっている。

田川地方は、弥生前期の遺跡として知られる下伊田遺跡（下伊田横手木所在）をはじめとして多くの弥生遺跡があり、山川市轄上原からは銅剣も出土している。また、弥生終末から古墳前期になると田川市伊加利から「長宜子孫」銘連弧文鏡、人任町柿原から八禽鏡が出土し、田川市鉢町阿夫婦塚の大型石棺からは鏡・銅剣・玉類・貝輪等も出土している。

古墳時代の大形古墳としては、田川市大字位登字口渡に所在する位登古墳は箱式石棺を主体部とした古式の前方後円墳として知られ、円墳としては田川市大字伊田字セスドノに所在するセスドノ古墳は古式横穴式石室を主体部とし、周濠・周堤を備えた径80mの大型円墳として知られている。後期古墳になると、今回報告する夏吉古墳群は石室規模の大きな古墳として知られ、1号墳は石柵を持ち、2号墳は巨石を使用し石室全長が8.6mに達する(註1)。

横穴群になると、彦山川およびその支流が浸食した各谷の岩壁に無数に散在し、その実態も不明な点もある。これまでに調査されたものには、田川市弓削山の狐ヶ迫横穴群(註2)、大任町狐塚古墳群(註3)、同町大行事横穴群(註4)などがあるが、未調査の横穴墓にも田川市伊加利字経塚に所在する経塚横穴群中には、石室内壁面に家屋風の柱や杏葉状の鍾飾を浮彫りにしたものなどがあり、早急な横穴群の実態調査が望まれる。

(柳 田)

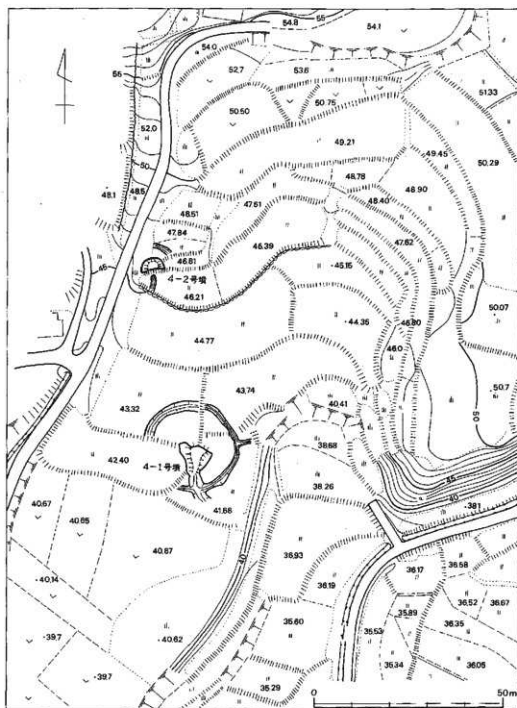
Ⅲ. 夏吉古墳群の調査

1. はじめに

夏吉古墳群とは、田川市大字夏吉に点在する古墳に命名されたもので、古墳は広範囲に分布して密集するものではない。古墳は巨石を使用したものも多く、これらは小丘陵に1基が命主となり、多くて2・3基の小円墳で群をなす程度のものである。しかし、2号墳のように1つの丘陵に1基しか見られないものもあり、一般的にこれらを同一古墳群として扱うのは適当ではなく、不便である。現に、今回調査した4号墳のように、隣接した地区に古墳が現在していながらこれらには番号がなく、番号を追加しようにも遠距離の飛地からの番号となる。

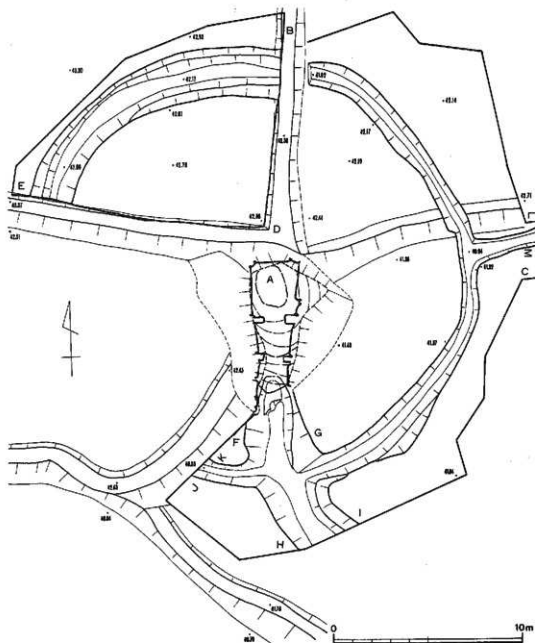
第1図周辺遺跡名

- ④ 天神山古墳群 ⑤ 岩八幡境内古墳群 ⑥ 上吉田横穴群 ⑦ 鹿ヶ原古墳群 ⑧ 香春隠神社古墳
⑨ 大婦塚古墳 ⑩ 堂ヶ丘横穴群 ⑪ セスドノ古墳 ⑫ 豊前天台寺廃寺 ⑬ 天台寺瓦葺跡
⑭ 成導寺公園内古墳群 ⑮ 経塚横穴群



第2圖 夏商古墳群付近地形図(1/1000)

したがって、今回の調査現場では仮番号を付して処理したが、報告に当っては既古墳名を尊重して、4号墳を4-1号墳とし、無番号墳を4号墳を含めて4-2号墳とすることにした。



第3図 夏吉4-1号墳墳丘実測図(1/200)

これはあくまでも一時渡ぎの処置で、今後の古墳群の詳細な分布調査と古墳群名の整理が必要である。

2. 第4-1号墳

(1) 墳丘

現状では、墳丘の盛土は石室を覆うわずかなものであったが、石室に巨石が使用され規模も大きいところから、可能な限り周溝を追求した。石室の周辺は水田となって、時節柄変作の頃で、調査予定地の半分に友があった。このため土地所有者にはご無理を願った。石室周辺の4分の3の表土剥ぎの結果、東西径22.5m、南北径21mの円墳であることが判明した。周溝は削平された水田ほど細かったが、高位置に当る北西側周溝は幅2.6m、深さ0.9mの規模で残っていた。周溝は石室から延びた墓道と南側で交差するが、墓道から45度東側の位置に周溝の分岐がある。この分岐溝は、その周辺の周溝の幅や深さに変化がなく、排水溝とも考えられない。周溝は、この分岐点から南側に向けて傾斜し、大きな墓道に流入する形態をとって、実質的な排水溝は墓道にある。

周溝の断面形は逆台形を呈し、堆積土は最下層に砂質の褐色土、下層に砂質黒褐色土、中層に黒褐色土、上層に粘質黒色土があり、粘質黒色土の堆積土があることから、水が溜ったことも判明した。

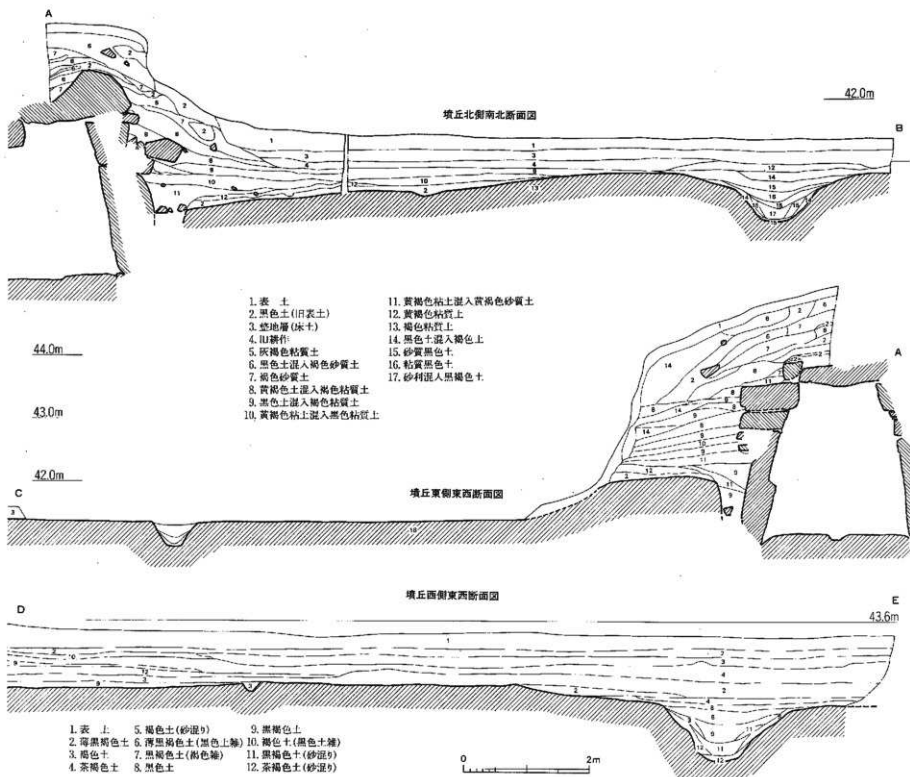
現在の墳丘頂部の高さは、標高45.14mであるから南側周溝底からの高さ4.79m、北側周溝底からの高さ2.87mの墳丘高となるが、墳丘高は現状ではかなり低くなっているものと思われる。

また、現状での墳丘の段築は、墳丘西側の東西断面図（第4図）にわずかに観察できるように、地山整形の1段目と2段目の線部がかろうじて残っている。この観察から1段目の平坦部は、幅1.6mのものであったことがわかるが、これは南側でも周溝までの墓道の長さで、1段目の段築の存在は証明できる。したがって、墳丘2段目の幅径は17m前後の大きさとなる。

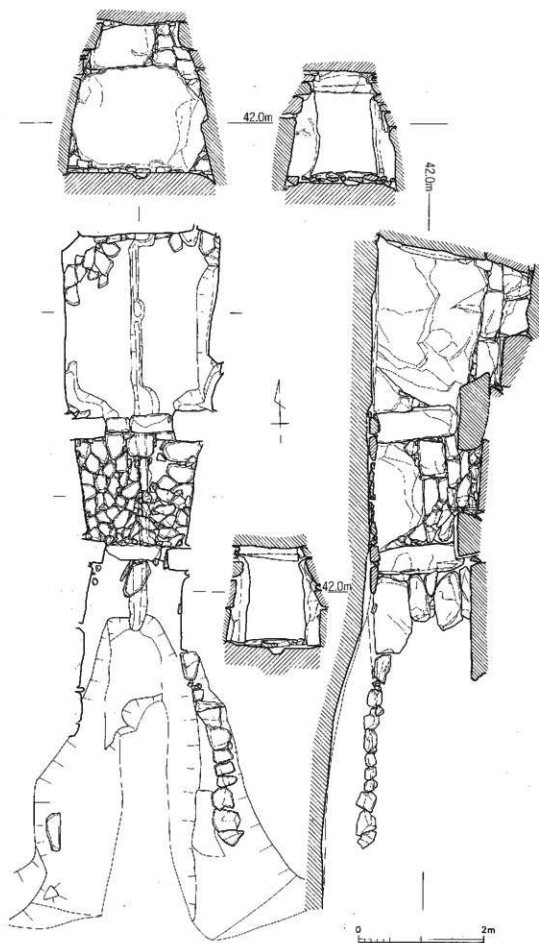
(2) 石室

石室は、前室を備えた複室構造で、奥壁から羨道までの全長7.2mの規模である。全体に花崗岩の巨石を使用しているのを特色とし、玄室の3壁に各1枚の巨石を立て、その上に1～2石を平積みする方法をとる。玄門と前門は、その名にふさわしく1枚の柱状石を立てている。玄室の天井は、玄門に架構した巨石からさらに1巨石を持送り式に架構し、最終的に巨石1個を天井石としている。

前室は、両側壁に前室高の約半分の高さの腰石1枚を立て、その上に割合小さな花崗岩を平



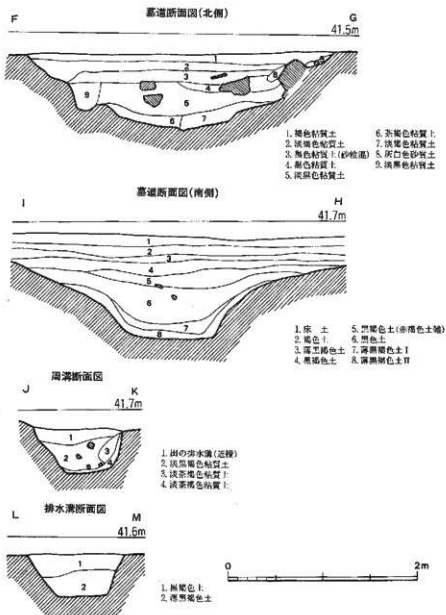
第4圖 墓古4-1号墳 丘断面図(1/60)



第5圖 夏吉4-1号堆石窠実測図(1/50)

積みしている。前室の天井は、玄門と前門に架構された巨石に、その間隙を埋めるかっこうで巨石を架構している。

羨道は、腰石として2～3石を並べるが、大きさや積み方の面において、その上の石と変るところがない。羨道は東側壁が一部破壊されているが、西側壁と天井石から見ると、さほど失



第6図 夏吉4-1号墳墓道・周溝土層断面図(1/40)

われていないことがわかる。天井は、巨石の板石1枚を使用している。

石室の床面には、玄室と前室に割合大きな板石を利用した敷石があり、前室はほぼ完全に残っていた。敷石の下には、石室主軸と一致した石室中心に幅約15～17cm、深さ約10cmの排水溝があり、墓道に続いている。羨道では、この排水溝のみに板石で蓋をしたらしく、床面全体に敷石を施したものではない。

石室の閉塞はこの羨道にあり、人頭大前後の石で前門を塞いでいたらしく、その状態がわずかに残っていた(図版3-1)。

石室各部の規模は、玄室が長さ2.8m、奥壁幅2.5m、前面幅2.25m、高さ2.4m、玄門が下幅1.05m、上幅0.9m、高さ1.3m、前室が長さ1.6～1.7m、奥幅1.95m、前幅1.6m、高さ1.7m、前門が下幅1.0m、上幅0.8m、高さ1.35m、羨道が2.0m、奥幅1.45m、前幅1.65m、高さ1.6mの大きさである。

墓道は、羨道に続く素掘りのものであるが、羨道から伸びる石列が上段にある。墓道の石列は、割合小石で東側が3m続き、周溝と交差する手前で切れる。墓道は、周溝との交差点から南側は急激に東に屈折するが、これは墓道が排水溝も兼ねているところから、東側の谷に向けて延びているものと思われる。同時にこれは、集落から墓に至る「はかみち」でもある。

墓道の規模は、羨道から長さ8mを調査したが、羨道幅と同じ1.6mから南端で幅3.3m、南端の深さ0.85mの大きさで、横断面形は逆台形を呈する。

石室の構築は、北側の南北断面土層図を見ると、旧地表から1.15mの深さを掘り石室の床面としているが、石室掘方と奥壁や側壁材との間隙は上端で40～50cm程しかない。また、石室の腰石も、床面以下に深く掘り込むのではなく、わずかに掘り込んで根石を置く程度のものである。石室を構築した石材の間には、境丘断面土層図を見る限り、わずかに黄褐色粘土を詰込んでいる程度である。

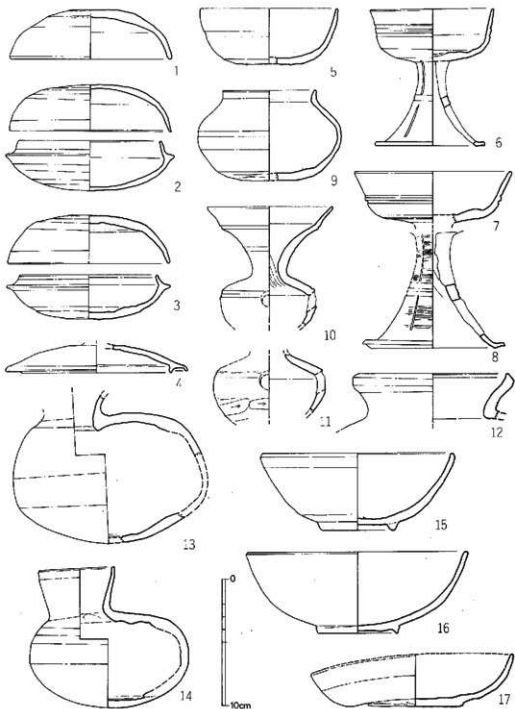
(3) 遺物

① 遺物の出土状態

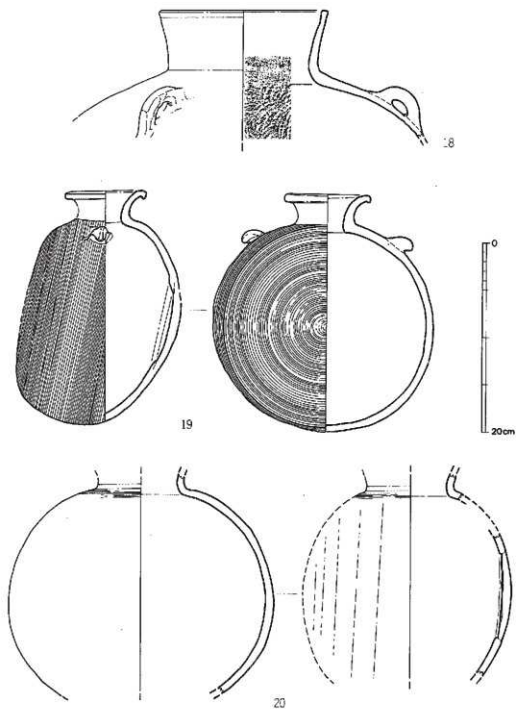
夏吉4-1号墳では、遺物は石室内全面と墓道、さらに周溝内から出土した。しかし、石室内は完全に攪乱され、副葬品等が原位置を保っているものはなく、耳環以外の土器は周辺の開掘時に石と共に外部から投入されたものである。

耳環は、玄室内から出土したが、攪乱された土の内にあり、床面から浮いていた。

土器が最も多く出土したのは、墓道と周溝の交差点付近で、上層の黒色粘質土層から中層の黒褐色土層に多く含まれていた。須恵器の蓋杯や提瓶(19)は、破片がまとまって出土したが、二耳壺(18)や大甕(21)は散乱していた。



第7圖 4-1号墳出土土器実測図①(1/3)



第8图 4-1号填出土器实测图②(1/4)

周溝では、墳丘の北東側にもわずかであるが須恵器片(5)が出土した。

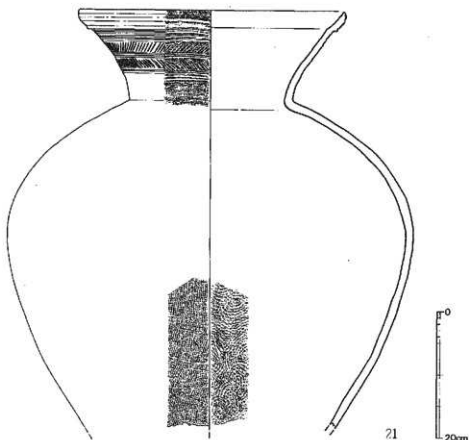
② 上 器

夏吉4-1号墳では、墓道とそれに近い周溝内から集中して土器が出土した。出土した土器の大半は須恵器で、土師器は墳丘の北東側周溝と墓道南端最上層の黒色土から出土した高台付碗3点のみである。

須恵器 (第7～9図1～14・18～21)

蓋 杯 (1～3) 蓋・身共に直径13cm前後の大きさで、2・3はセットとなる。1は北東周溝、2・3は南西側周溝内出土である。3の蓋のみ天井外面に平行タタキが残るが、他は蓋・身共にヘラケズリされている。2には蓋・身共に内面天井と底部にヘラ記号がある。

蓋 (4) 墓道と南西周溝から出土したもので径14.4cmの大きさ。天井につまみが付くと思わ



第9図 4-1号墳出土土器実測図③(1/5)

れる。内外面共にヨコナデされている。暗灰色を呈し、微砂を多く含む。

杯 身 (5) 北東側周溝から出土した径11cm、高さ4.4cmの大きさのもの。外面底部のみヘラケズリされている。灰褐色を呈し、細砂を多く含む。

高 杯 (6~8) 墓道から同型式のもものが3点出土した。6は口径9.7cm、高さ10.8cm、7は口径12.5cmの大きさで、7・8が多少大きい。6は杯部外面の底部近くにヘラケズリがある外は、内外面共にヨコナデされている。これは7も同様であるが、8の脚部外面にはカキ目と内面にはしほり痕がある。6は暗灰色をし、細・微砂を多く含む。

壺 (9) 墓道から出土したもので、口径7.4cm、高さ7.1cmの大きさ。底部に静止ヘラケズリがあるほかはヨコナデ調整されている。内面は灰色、外面は暗灰色をし、微細を多く含む。

甗 (10・11) 2点共に墓道から出土したもので、10は口径10cmの大きさ。頸部内面にしほりが残り、底部が静止ヘラケズリされている外はヨコナデ調整。暗灰色を呈し、細砂を含む。

小 甗 (12) 南東側周溝から出土したもので、口径12.7cmの小型品。口縁から肩は灰をかぶり、肩部外面は格子タタキ、内面は同心円文が残る。暗灰色で、細砂を多く含む。

平 瓶 (13・14) 2点共墓道出土で、14は口径6cm、胴径12.5cm、高さ11cmの小型品。2点共底部にふきぎがあり、肩部にヘラケズリがある。13は底部付近がタタキ後ナデられており、同所に3本平行線のヘラ記号がある。両者共暗灰色を呈し、細砂を多く含む。

三耳壺 (18) 南西側周溝と墓道に散乱していた。口径17.7cmの直口壺で、胴肩部に3個の耳を付けている。口縁から肩には灰がかぶり不明なところがあるがナデ調整されているようだが、胴部内面には同心円のタタキが残っている。胎土は黒褐色を呈し、細砂を多く含む。

提 瓶 (19・20) 2点共墓道から出土したもので、20の破片はかなり散乱していた。20は口径8.6cm、器高24.8cmの大きさで、肩に退化した把手を持つ。胴部は平坦面的一方にヘラケズリが残るが全面にカキ目調整がなされている。平坦のヘラケズリのない方にふきぎがある。体部の中位以上に自然釉が見られ、下位と内面の部分に灰をかぶる。灰黒色で細砂を含む。

20は破片が少なく全形を知らないが、かなり大型のものである。灰黒色で細砂を多く含む。

大 甗 (21) 灰室・前室・墓道・南西側周溝に散乱していたものであるが、大半は墓道と南西側周溝に集中していたことから、開壺時に右室内に投入されたものと思われる。口径42.5cm、胴最大径64.5cmの大きさで、胴部外面の格子タタキと内面の同心円タタキが著しい。口縁部外面には3帯の凹線帯の間の2帯に刺突文帯がある。胎土は褐色と茶灰色で、細砂を含む。

土師器 (第8図15~17)

高台付碗 (15・16) 15は北東側周溝、16は墓道から出土した。15は口径15.5cm、高さ6cm、16は口径17.6cm、高さ6.4cmの大きさ。15は全面にヨコナデされているが、16は内面にミガキがある。淡茶色と暗灰色を呈し、微細を多く含むが精良である。

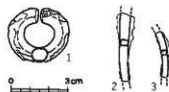
杯 (17) 墓道出土で、口径約16cm、高さ4cmの大きさ。平底を有し、磨滅し不明だが糸切り

の可能性あり。茶色を呈し、微砂・金雲母を含む。

③ 装身具

耳環 (第10図1)

耳環は、石室内が雨期には水没することから保存が悪く、外側の大半が腐食して剥落している。内側には、わずかに金色のあるいわば銀が残っている。耳環は、外径3.2cm、内径1.6cm、身径8～9mmの大きさである。



第10図 4・1・2号墳出土
耳環・鉄器実測図(1/2)

3. 第4-2号墳

(1) 墳丘

夏吉古墳群中にありながら番号の付いていなかったもので、水山の片隅に墳丘の南半を削平されて残っていた。

墳丘の北東側のトレンチに周溝が検出され、この周溝から墳丘を復原すると、直径約9mの小円墳であることが判明した。周溝は、幅1～1.3m、深さ55cmのもので、横断面形は逆台形をしている。

墳丘の段築は、墳丘北側の南北トレンチで観察されるように、地山整形による幅約90cmの平坦面が周溝の内側にあるところから、2段以上の段築を持っていたことが明らかである。したがって、墳丘2段目の裾径は、直径6.5m前後の大きさとなる。

周溝内の堆積土は、砂質の褐色系の土層で埋まり、周溝の埋没後にわずかに黒色土層があるところから、かなり急激に周溝が埋没し、水溜りができる状態にはなかったようだ。

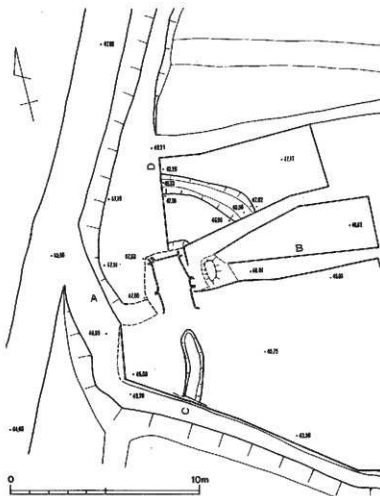
(2) 石室

石室の石材は、床面の敷石以外は完全に抜き取られていた。石室内の攪乱土を清掃したところ、奥壁や側壁の抜き跡が検出されたが、石室の規模を決定できるほど保存が良いものではなく、玄門や前室・羨道の存在を知ることができず、石室全長など不明である。

玄室は、奥壁に1枚石の腰石を使用し、両側壁は長さ1.6mの1枚石の腰石を立てていたことが抜き跡からわかるが、これ以上のことは抜き跡からは不明である。次に敷石から判断すると、奥壁から2.1mのところまで敷石が残っていることから、玄室の長さは2.1mか、それ以上の規模のものとなる。

玄室の敷石は、割合大きく扁平な石を使用し、その組合せの間隙を小石で埋めている。

奥壁から4.9mのところから素掘りの墓道が検出されているところから、石室全長もこれより



第11図 夏古4-2号墳付近地形図(1/200)

② 土 器

土器は、墓道から主に出土したが、石室内の敷石間からも須恵器と土師器が出土した。第14図の1～7が石室内、8～19が墓道から出土したものである。

須恵器（第14図1～6・9～17）

蓋 杯（1～6・9～16） 蓋は3類4種に分けられ、身は5類6種に分けられる。

蓋のI類（1）は、直径10.5cmでつまみを持たず、II類（10・12・13）は直径8.5～9cmの小型でつまみを有する。IIIa類（2・4）は直径15cmの大型で宝珠つまみを有する。IIIb類（15）は直径13cmの中型で宝珠つまみを有する。

短いものと思う。

墓道は、長さ3.9mを調査したが、幅は削平された面で90cm、南端の深さ32cmの規模であった。墓道には黒褐色砂質土が詰っていたが、これには完形品を含む土器があった。

(3) 遺 物

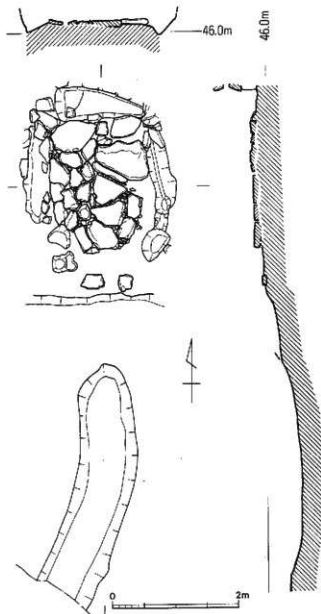
① 遺物の出土状態

夏古4-2号墳では、遺物は石室内と墓道から出土した。石室内では、擾乱土と敷石間から鉄鍔片と土器片が出土し、墓道では完形品や破片でも散乱することなく土器がまとまって出土した。



第12図 夏青4-2号墳墳丘断面図 (1/50)

身の1a類(14)は口径12.8cmの大型で、底面は調整不明。1b類(9)は直径10.1cmで蓋との



第13図 夏吉4-2号墳石室実測図(1/60)

区別がつきにくく、底部外面は未調整。Ⅱ類(5)は口径9.6cmの小型で深い。

Ⅲ類(11)は口径8.8cmの小型で未調整の平坦な底部を有する。Ⅳ類(6)は口径14cmで、立上りは斜に直線的である。高台が付く可能性があり、蓋Ⅲa類とセットになろう。Ⅴ類(16)は細片で不明だが、高台が付き、丸味のある体部を有する。

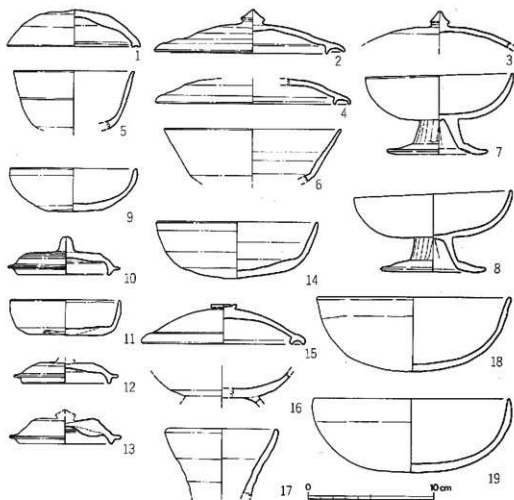
長頸壺(17) 口径約9cmの大きさで、内外面共にヨコナデ調整されている。灰白色を呈し、全体に灰をかぶり、胎土に細砂を若干含む。

土師器(第14図7・8・18・19)

高杯(7・8) 2点共同型式のもので、7が口径11.7cm、高さ6.5cm、8が口径12.5cm、高さ6.5cmの大きさ。杯部は内外面共にガキがあり、脚部柱状部は内外面共にケズリ調整されている。

両者共に淡茶色を呈し、微砂・赤褐色粒・金雲母・角閃石などを含む。

杯(18・19) 18は口径15.5cmの大きさで、口縁端がわずかに外反するのに対し、19は口径15.8cmの大きさで、口縁端が内湾する。調整法は2点共摩擦減が著しく不明。



第14図 4-2号墳出土土器実測図(1/3)

③ 鉄 器

鉄 鍬 (第10図2・3)

鉄鍬の茎らしきものが2点出土している。2は現長3.7cm、3は現長2.4cmの大きさ。

4. 小 結

夏古墳群は、正式に発掘調査されたものはないが、その内容の一部が明らかなものに2号墳がある。2号墳は、4-1号墳以上の巨石を利用した大型石室を持ち、羨道の高さも人の身

長以上ある。石室内からは須恵器や耳環などが発見されており、その時期は4-1号墳と同じⅢb式のものである。

2号墳と4号墳の立地を比較すると、2号墳がより高い丘陵の尾根頂部にあるのに対し、4号墳は丘陵上といえども斜面にあり、石室規模も4号墳が劣っている。時期は不明だが、同集塊の石室を持つ1号墳でさえ、玄室奥壁に石棚を持つことからすれば、4号墳より優位にあったことは確実であろう。

しかし、横穴式石室墳の少ない田川地方にあっては、墳丘が直径20mあり、巨石を使用していることからすれば、横穴墓群が圧倒的多数を占める山川地方にあっては夏吉4-1号墳の主は、田川地方の有力勢力の墓であったことは確かであろう。

夏吉4-1号墳の須恵器は、北九州市天観寺山竈跡のⅢb式併行期(註5)を最古に、Ⅳ式併行期まで追葬あるいは供献されている。古墳の築造時はⅢb式より古い可能性があるが、墳丘下の築造時の土器が不明なため、その時期も不明といわざるを得ない。

夏吉4-2号墳の須恵器は、Ⅴ・Ⅵ式併行期のもので、土器からも追葬と追供献が明らか。
(柳 田)

註1 長谷川清之編「豊ヶ丘横穴墓群採集の埴輪」(『田川歴史資料集』(1)-古墳時代編、1982)

註2 川述昭人編「狐ヶ迫横穴群」(『田川市文化財調査報告書』1、1981)

註3 大任町教育委員会「狐塚古墳群」(『大任町文化財調査報告書』1、1976)

橋口達也編「狐塚古墳群Ⅱ」(『大任町文化財調査報告書』2、1978)

註4 大任町教育委員会「大任寺横穴群」(『大任町文化財調査報告書』3、1979)

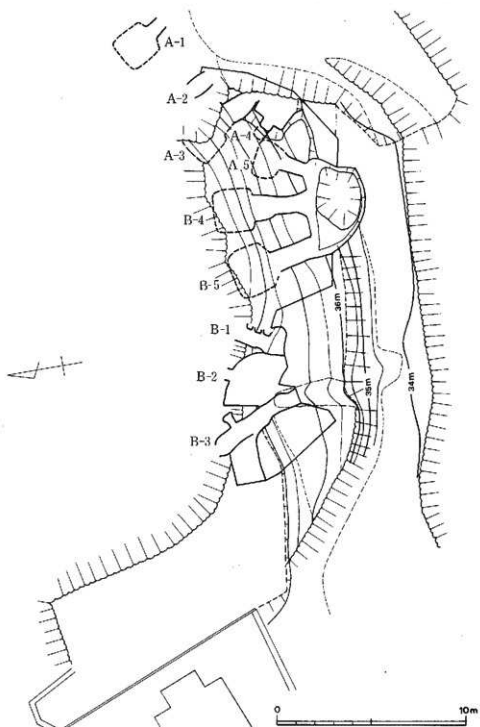
註5 小田富上雄編「天観寺山竈跡群」(1977、北九州市理産文化財調査会)

Ⅳ. 清瀬横穴群

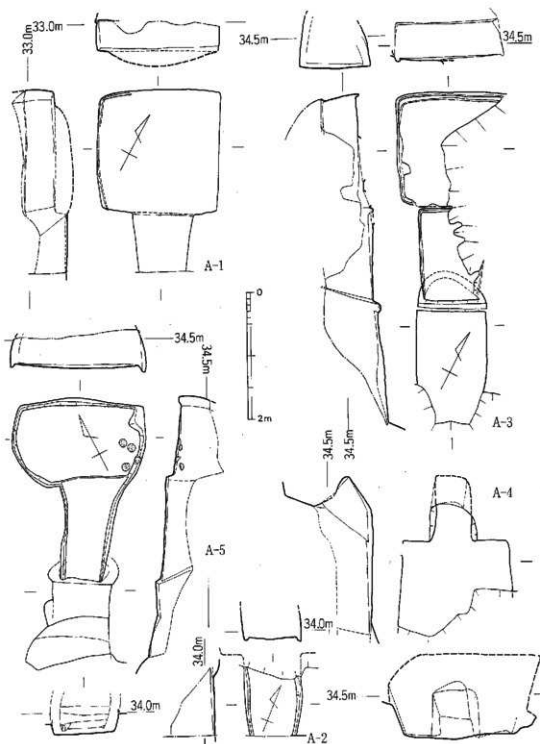
1. はじめに

清瀬横穴群は、土取工事が始まった昭和56年9月に3基の横穴を調査しているので、これを1~3号としたが、昭和57年5月に調査した時には工事が進み、さらに上段の横穴群を破壊していた。横穴群は、南面する急斜面に営まれているが、前回調査の位置を最下段とすると、さらに中段と上段に横穴墓が営まれていた。土取工事は裏面の北側から進み、上段の横穴墓の玄室を完全に消滅させていた。

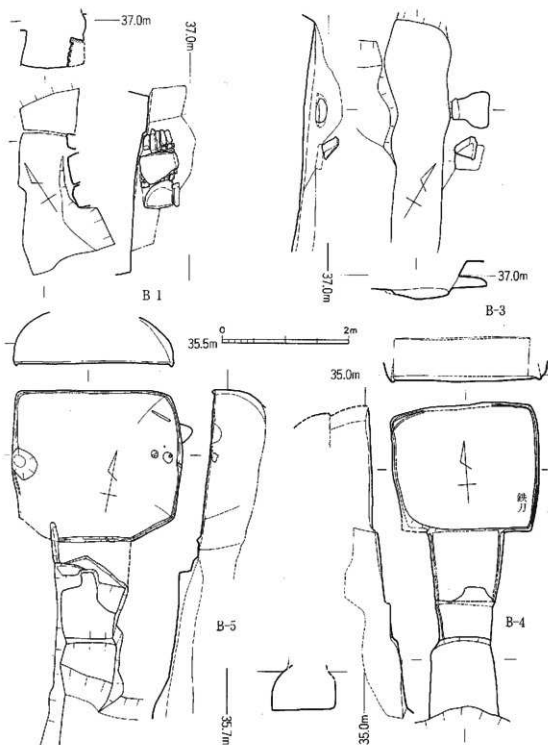
清瀬横穴群の番号は、下段をA群として昭和56年に調査した東から順にA-1~A-5号とし、上段の東からB-1~B-3、中段もB群とし、B-4~B-5号とした。(柳 田)



第15图 清海横穴群地形实测图(1/200)



第16圖 A-1・2・3・4・5号横穴式測図(1/60)



第17图 B-1·3·4·5号横穴式测网(1/60)

2. 遺 構

(1) A-1号横穴

主軸方位はN28.5°Wで南南東方向に開口する。玄室の平面形は方形であり、規模は中央部幅1.9m、長さ1.95m、玄門部幅0.95mを測る。奥壁の左隅床面には一部分であるが周溝を有し、床面から45mの位置には軒を設けている。羨道部は長さ90cm程確認されており、床面は水平であるが、玄室床面よりは20cm程低くつくられている。

(2) A-2号横穴

主軸方位はN23°Wで南南東方向に開口する。玄室は上取り工事により崩壊していて不明である。羨道部床面の両側には幅7-8cm、深さ5cm程の周溝を有する。

(3) A-3号横穴

主軸方位はN31°Wで、南南東方向に開口する。横穴の右側半分程は上取り工事の際、破壊されている。玄室の平面形は方形を呈しており、規模は、幅1.75m、長さ1.8mを測り、床面には周溝を設けている。床面から50m程の位置に軒を設けている。羨道部は長さ1.4m程確認されており、床面は玄室より一段低い高さにある。羨道部両側に周溝を有する。(川 述)

(4) A-4号横穴

A-3、5号間に形成され、A-3号横穴を切っている。幅1.7mの羨道部?に、長さ1m幅60cmほどの玄室部を寄った途中で放棄したものと思われる。(木 下)

(5) A-5号横穴

本横穴は、B-4・5号と前庭部を共有しているが、床面レベルからは下段に属するところから、A群に含めた。横穴の主軸はS27°Wで南西側に開口している。

玄室は、基本的には長方形プランを呈するが、前面に丸味があるため不整形をなす。長さ1.37m、幅2.14mで、高さは不明。床面には周溝をめぐらし、壁面から天井は、床から直接ドーム状となる。床面南側に、瓦形の須恵器蓋杯2組が散乱していた。

羨道は、長さ1.65m、幅0.65-1.2mあり、床面は玄室と11cmの段をつけ、側溝を備える。羨門は傾斜して、さらに段をつけて蓋受けを造付けているが、その最大幅1.1mで丸味をもつ。墓道は、幅0.94m、長さ1.3mで共有の前庭部に落ちる。

(5) B-1号横穴

残っている羨道は、長さ75cm、前幅80cmのものであるが、奥幅は1m前後となる。

墓道は、床面が羨道より6cm下がるが、東側壁に石組を持つのが特徴である。石組壁は、5段以上の平積みをする部分と板状石を立てるものがある。石材は一部花崗岩を使用するが、大半は砂岩である。西側壁には石組がない。

(7) B-2号横穴

前庭部しか残っていないが、羨道の幅は60cmであつたらしい。前庭部は西側壁が明瞭だが、東側壁は不明。前庭部床面南側には、多くの土器片と紡錘車が出土した。(柳田)

(8) B-3号横穴

長さ4.6m、幅0.95～0.8mの墓道で、主体となる羨道、玄室部は既に削平されている。墓道はB-2号の前庭を切って形成される。この墓道の東側に支横穴1が作られる(B-3-b)。支横穴は長さ55cm、幅57cmで、アーチ状の天井部までの高さ17cmにすぎず、墓道からは20cm上部に作られる。

(9) B-4号横穴

A-5号、B-5号間にある横穴で、本横穴墓群では残存状態の良好な部類に入る。前庭部は前述したA-5号、B-5号と共有する。墓道は長1mと短く、羨道部側に狭くなる。羨道は台形に近く、長さ1.7m、幅は玄室側で1.2m、墓道側で0.82mを測り、墓道付近で10cmほどの段を有す。玄室は隅丸長方形に近いプランで、東面2.33m、南北1.95m。天井部と壁の境には段を持つ。天井部の大半は崩壊している。(木下)

(10) B-5号横穴

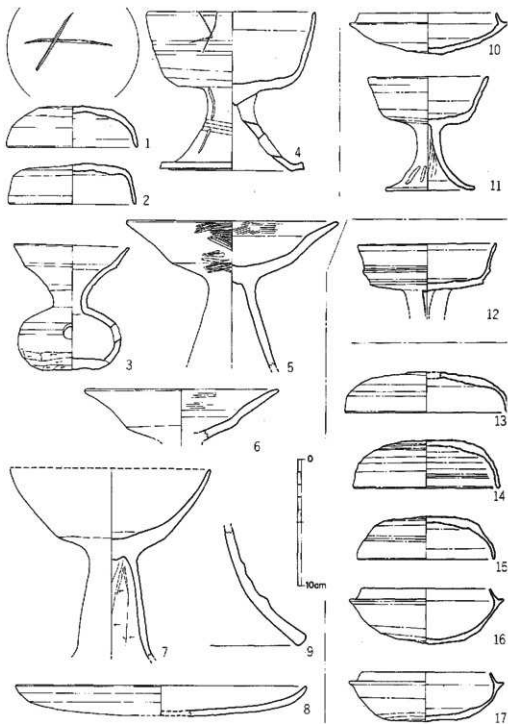
中段の西端にある横穴で、天井部が崩壊し完全に埋没していた。横穴の主軸はS11°Eで南側に開口する。玄室の平面プランは、側壁と前面壁との角度が鈍角をなすところから六角形となっている。床面は、長さ2.4m、幅2.78mの大きさで、幅約5cmの周溝を備えている。周溝は玄門部にもあり、羨道の西側壁溝によって排水している。天井は、高さ約0.9m程に復原でき、四隅に棧を持つ寄棟造りであるが、側壁と天井部に明瞭な境はなく、床面から直接天井部のアーチとなる低い構造となる。

羨道は、長さ1.5m、奥幅1.25m、前幅0.75mの大きさで、床面中央で30cmの段を持つ。天井部は完全に崩壊しているが、東壁の一部が残る、前面に閉塞用の段がうかがえる。

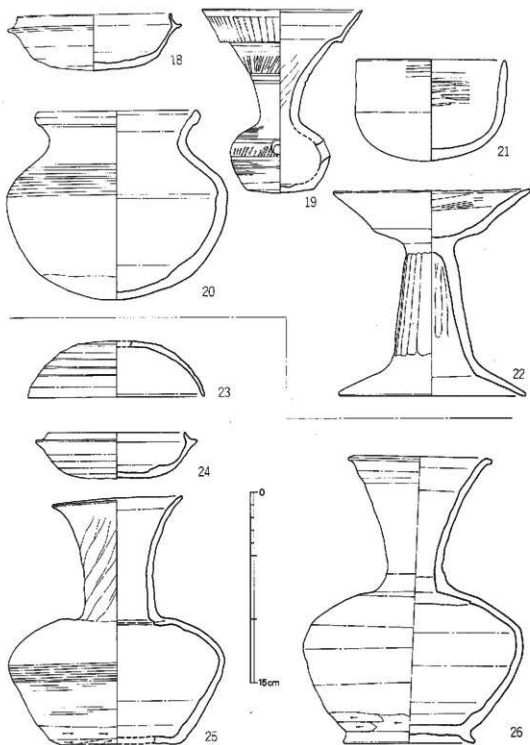
墓道は、長さ1.15m、幅0.85mのもので、A-5号、B-4号と共有の前庭部に通じている。

(柳田)

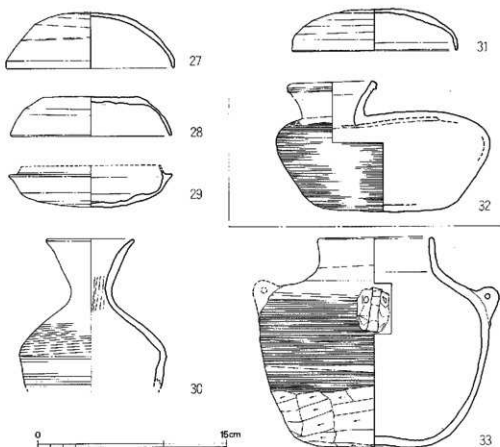
造物番号	器 種	上器の種類	出七地点	法 量 (cm) ①: 生 ②: 高 ③: 新加後 ④: 既 経	調整法及び特徴	備 考	時期
11	高 杯	須恵器	A-2号 甕 道	①9.6 ②8.95 ④7.1	杯部設置はへう割り、他は焼ナテ調整。杯部内外は土質を大層がけつく。灰白色、焼成不良、灰白色を多く含む。	脚下平部にへうのへう記号。	IV
12	高 杯	"	A-4号 甕 室	①11	仔細中ほど、他は焼ナテ調整。内外表とも焼ナテ調整、3ヶ所に焼し、灰白色、焼成良好、砂粒を多く含む。		IIIb -IV
13	杯 蓋	"	A-5号	①13 ②3.2	大平部外面は灰白色、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成良好、小砂粒を含む。		IV
14	杯 蓋	"	A-5号 玄室床面	①11.7 ②3.8	灰白色外面は土質、この部分内面はナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、焼成は不良で、灰白色を多く含む。	生焼け。 天竺杯外面は調整。	IV
15	杯 蓋	"	"	①10.9 ②3.4	天竺杯外面は土質、この部分内面はナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
16	杯 身	"	"	①10.2 ②4.4 立上り高 0.8	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
17	杯 身	"	"	①10.2 ②3.9 立上り高 0.8	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
18	杯 身	"	B-2号 甕 室	①12.2 ②4.4 立上り高 0.8	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
19	杯 身	"	"	①12.7 ②14.5 ④7.8	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
20	表	"	"	①12.6 ②14.9 ④17.5	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
21	碗	土師器	"	①12.0 ②8.0	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。	体部外面に調整。	
22	高 杯	"	"	①15.6 ②16.1 ④14.9	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		
23	杯 蓋	須恵器	B-3号	①14.0 ②4.5	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
24	杯 身	"	B-3号 甕 室	①12.9 ②3.6 立上り高 0.6	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
25	長 頸 壺	"	"	①10.4 ②19.5 ④17.1 ④9.6	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。	無高台 杯部内面に調整後合真	VI
26	長 頸 壺	"	"	①11.5 ②22.5 ④17.4 ④10.5	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。	有高台 調整部内面に調整後合真	VI
27	杯 蓋	"	B-4号 玄室周溝内	①13.4 ②4.5	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
28	杯 蓋	"	B-4号 甕 室	①12.9 ②3.15	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
29	杯 身	"	"		灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
30	壺	"	B-4号 玄室周溝内	①7.0	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
31	杯 蓋	"	B-5号 玄室床面	①13.1 ②3.3	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
32	平 瓶	"	"	①7.1 ②10.4 ④16.9	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV
33	四耳 壺	"	B-4号 甕 室	①9.2 ②16.5 ④18.1	灰白色外面は土質、他は焼ナテ調整。灰白色を多く含む。焼成は不良で、灰白色を多く含む。		IV



第18图 清湖横穴群出土七器实测图①(1/3)



第19圖 清源橫穴群出土土器実測図②(1/3)



第20図 清瀬横穴群出土土器実測図③(1/3)

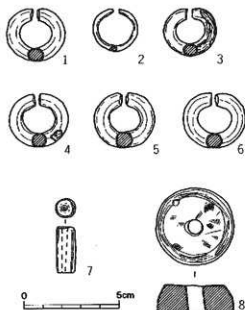
(2) 装身具

① 耳環

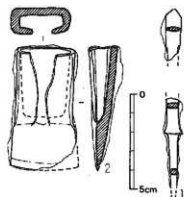
4基の横穴から5個が出上した。全て中実で、2が銅の棒を折り曲げた細身づくりであるのを除けば、他は皆銅地金銅張りの似た形制を示す。計測値について

表2 耳環計測表

出土横穴	番号	最大径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	つくり
A-3号 墓道上層	1	30.3	7.0	19.1	銅地金銅張り
A-4号 前庭掘乱穴	2	22.6	3.0	2.1	銅地
B-4号 玄室床面	3	27.6	6.5	10.3	銅地金銅張り
B-5号 前庭部	4	30.6	7.2	19.3	"
" 玄室床面No.3	5	31.7	7.6	21.8	"
" 玄室床面杯下	6	32.3	7.5	24.0	"



第21図 清瀬出土装身具・紡錘車実測図(1/2)



第22図 清瀬出土鉄器実測図①(1/2)

は表2を参照。

② 管 玉

A-4号の玄室西南コーナーから出土したもので、碧玉製と思われるが、風化著しく、きわめてもろい。長さ21.3mm、最大径9.5mmを測る。

(3) 紡 錘 車

B-2墓道からの出土である。あまり質のよくない滑石製で、表面には無数の擦過痕をみる。断面台形を呈するが、中位で僅かに稜線がでる。最大径40.7mm、厚さ14.5mm、孔径9.0mmで、重さ43.8g。

(4) 鉄 器

出土点数は少なく、2基から計3点があるのみである。

1はA-3号墓道上層出土の鏃で両丸造の五角形に近い形状をなす。茎には木皮が付着す。

2は同じくA-3号墓道上層の出土で、刃部の一部を欠失する小型の斧である。全長6.5cm、袋部幅3.1cm。袋部の折曲げはかなり開いているが、欠損のためかどうかは不明。

3はB-4号玄室出土の大刀で、鞘口金具が銘着している。全長66.0cm、刃部長58.6cmを測る。鋒の刃部は、鍛造りの如き角度をもって屈折し、ふくらが粘れた形となる。鞘口金具は断面卵形で、長径3.0cm、短径2.5cm。長さは2.8cm。この鞘口金具の前に、鐙あるいは把えの金具と思われる鉄環がある。茎の目釘孔は1個だけ確認できた。

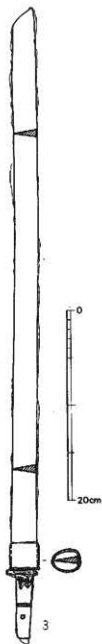
(川 述)

4. 小 結

清瀬横穴群は、岩盤が脆い上に崖下の宅地の削平によって、永年の間に岩盤そのものに無数の亀裂を生じていた。横穴群の中には、かろうじて天井を残しているものもあったが、それらは発掘作業するには危険な状態であったところから、天井を除去しなければならなかった。中にはB-4号のように完全に崩壊し、まったく空間を残さないものもあった。

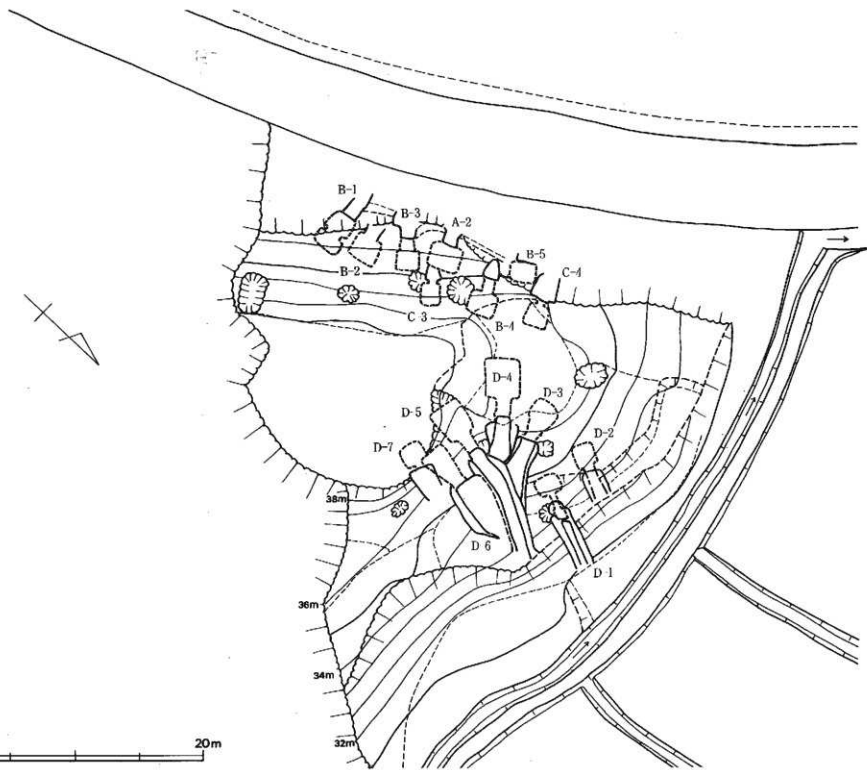
したがって、横穴群の立体的規模のつかめないものが多かった。報告では、横穴群をA・Bの2群に分類しているが、これは最初に述べたように横穴の床面レベルによって便宜上2グループに分けて調査したものであったが、実際は4グループに分けられる。最下段はA-1号で、床面が標高32.6mにある。第2グループは、A-2～A-5号で33.8m～34.4mの位置にあるもの。第3グループは、B-4・B-5号で35m～35.3mの位置。第4グループは、B-1～B-3号で36.4m～36.8mの位置にある。これは調査した横穴のみから見ると1m前後の差で、東側に位置するものほど低位置にあることになる。実際に、旧地形は東側程低いものとなるために、その傾向があるのは確実で、これは直下に民家があるため調査できなかったが、B群の下にA-1号のような第1グループのレベルの横穴が存在する可能性がある。

また、清瀬横穴群は西側にも断続的に存在するらしく、道路工事で破壊されたものが見られる。調査した10基の全てが破壊され、盗掘を受けており、さらに横穴の全平面図が判明したのが3基のみであった現状では、清瀬横穴群についての性格づけは困難である。



第23図 清瀬出土鉄器
実測図②(1/4)

A-1



第24図 伊田塚横穴群地形実測図 (1/300)

V. 伊田狐塚横穴群

1. はじめに

当該発掘調査は、個人による老人ホーム建設に伴っての上取り事業に起因する。

1982年3月、田川市大字伊田字狐塚の当該地を通りかかった人が、上取り中の丘陵断面に横穴が現れているのを発見し、福岡県文化課へ連絡した。県文化課は田川市教育委員会へ連絡をとるとともに、調査第一係主任技師井上裕弘が現地へ赴き、横穴がかなり分布することを確認した。上取り事業そのものは中止できず、急を要するとの土地所有者の意向があり、事業施行者と田川市教育委員会・県文化課とで協議の結果、4月初から発掘調査にとりかかることになった。

調査は1982年4月2日～4月17日の間に、雨天時も強行して実施したが、調査中には井川町教育委員長長谷川清之氏に多大な協力を受けた。また、福岡県文化財保護指導委員水上歳摩氏には現地に御助言を受けた。記して謝意を表します。

2. 遺 構

彦山川沿いに南から北へとびた丘陵が途切れた所の、南（南西）斜面と北（北東）斜面双方に横穴の構築をみる。北斜面は丘陵が北東へとびるので、地形的にも横穴の分布はもう見られぬであろうが、南斜面については、既に削平された地点にも少なからぬ数が存したと思われる。

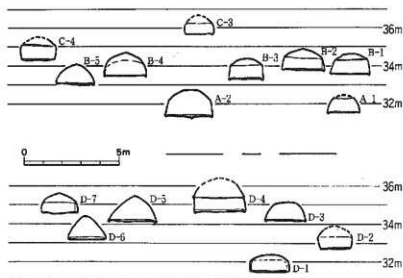
今回、発掘調査したのは、16基を数えた。南斜面については垂直分布を考慮して、便宜上A～C群に分け、9基を調査したが、地形的には一群として扱えられる。なお、C-1・2号については、調査が及ばなかったが、C-2号はつくりかけのものとみられ完全な形にまで穿たれていなかった。

北斜面はD群とし、7基を調査した。D-7号の東側5m程の所に竅突にもう1基が存したものの調査が及ばなかった。

以下、横穴盛全体を通じて見てゆくが、個々については表6を参照されたい。

(1) 垂直分布(第25図)

全ての横穴が墓道から玄室へと床面レベルが上昇しており、ここでは玄室床面のレベルをと

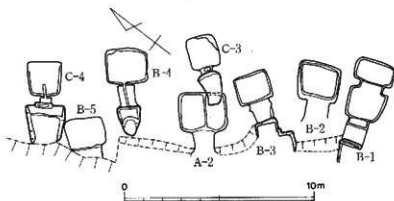


第25図 伊田孤塚横穴群垂直分布図(1/200)

りあげてみてゆく。

床面は標高31～36mの間にあり、第2図に示すとおりである。南斜面は、調査中は便宜的にA～C群としこの報告もそのまま行なっているが、C-4号はB群の延長ともみてとれる。地形的には削平された所も含めて、3段ないし4段にわたる垂直分布が可能であったと考える。それに反し北斜面（D群）は、いま知られている垂直分布が限界としてよい。

(2) 玄室の構造

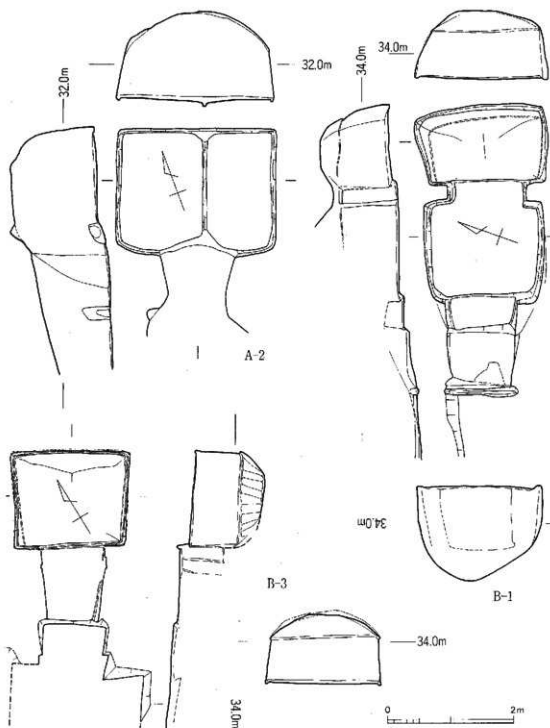


第26図 伊田孤塚A～C群横穴実測図(1/200)

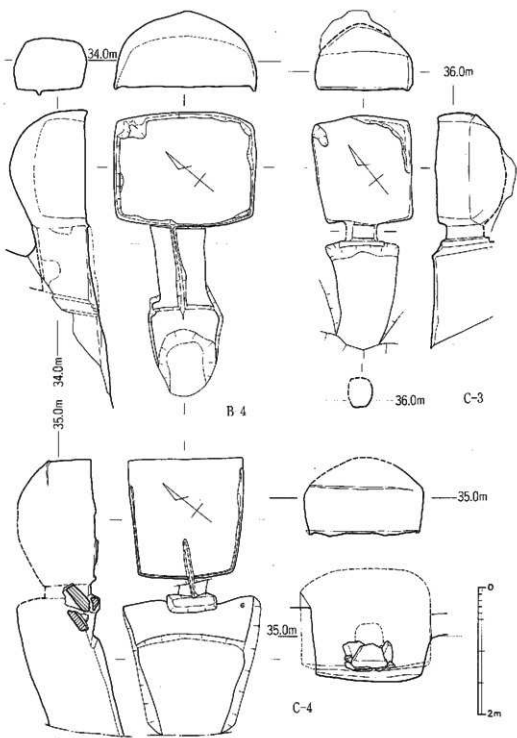
A 平面形

B-1号を除き
全て単室構造である。

B-1号についてははっきりした複室構造を有し後室が横長方形で、方形プランの前室よりも小さい。他は横長方形をなす



第27図 伊田孤塚A-2・B-1・3号横穴実測図(1/60)



第20图 伊田孤塚B-4・C-3・4号横穴式副图(1/60)

ものが6基、正方形のもの1基、長方形2基、そして羽子板形になるもの4基となる。特別にかわつた平面プランのものはない。

B 立面形

通例に従つて家形、ドーム形、アーチ形に分けると、家形が10基となり、次いでドーム形4基、アーチ形1基となる。家形のものは寄棟造の形態をとるのがほとんどだが、宝形造になるもの(D-5号)もある。全て妻入りの形で玄門がつく。

C 床面施設

周壁下に周溝(排水溝)をもつものが多く(11基)、そのうち3基は床面中央にも溝が走る。溝底のレベルは墓道側へと低くなっているのがこれが排水の役目をはたしたことは明瞭である。

敷石についてはB-4号、D-1号、D-4号の3基にみとめられた。いずれも、直径10~20cmの扁平な石を敷いていた。

羨道から玄室にかけて階段状になるものが、D-3号とD-5号で、D-3号は3段のまじく階段としてよいものといえる。

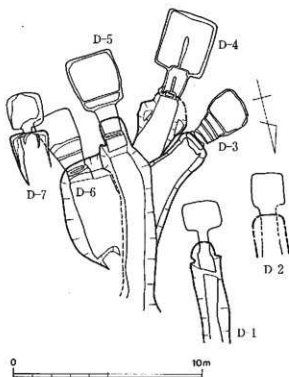
D その他

工具痕は詳細に観察すれば本来全ての横穴に見られるはずのものであるが、以下確認しえたものについて記す。

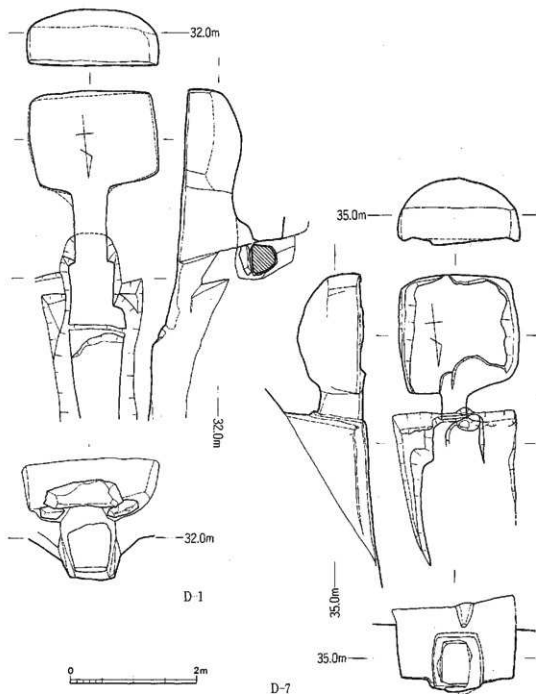
B-3号のものはきわめて明瞭で(図版14-4)、先端がU字形の幅12~15cmをはかる刃先をもつ工具らしい。側壁部は棟に向かって長さ90cmくらいまで一気に削るが、奥壁は短かくこまめに削っている。D-5号のそれは幅7~8cmを測る。D-7号の工具痕は幅5~7cmで、工具先端の幅は5.5~6.0cmと確認される。他にA-2号、D-3号、D-6号にて確認できた。

(3) 羨道および墓道

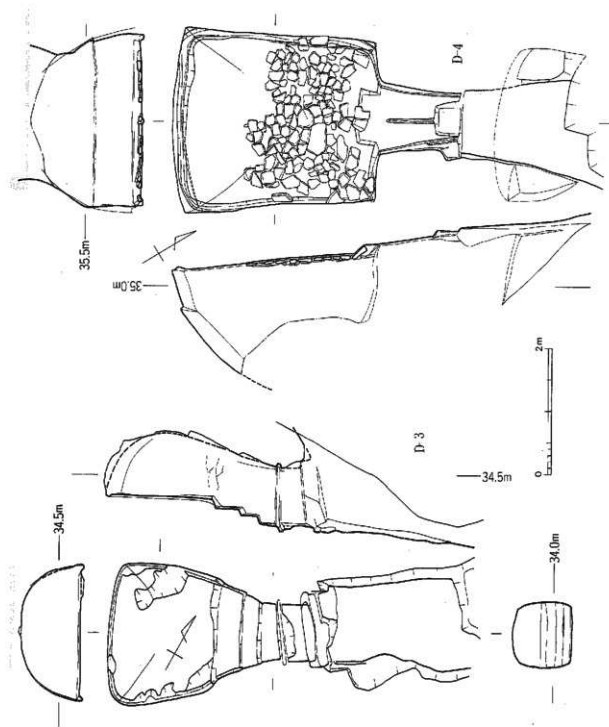
羨道は玄室への入口(玄門)から、およそ閉塞の所までをさすが、一部については、例えば



第29図 伊田塚横穴群横穴実測図(1/200)



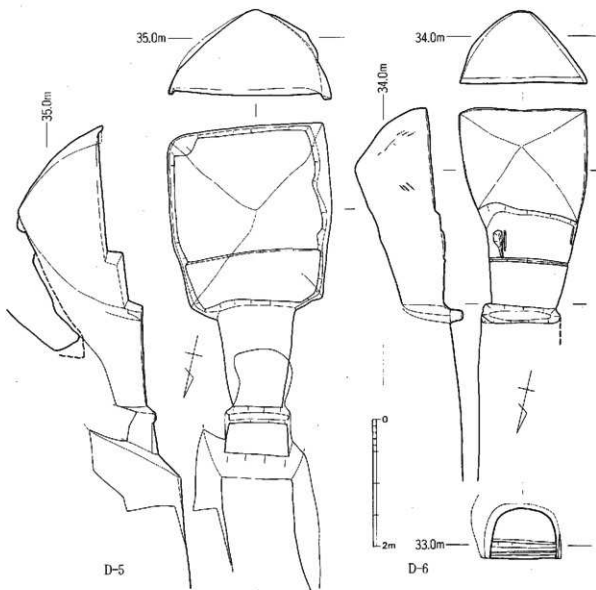
第30図 伊田狐塚D-1・7号横穴実測図(1/60)



第31图 伊出孤塚D-3・4号横穴実測図(1/60)

D-1号のように閉塞より前方に段がある所までを含めて取扱う。この狭道の構造に特別なものは見られないが、床面中央に溝をもつのにB-4、C-4、D-4の各号がある。

狭道途中あるいは最前面に、狭道主軸と直交して閉塞のために供された溝状の掘り込みをみるものがある。これは木（板）を使つての閉塞用とばかりはいえず、C-4号においては石で閉塞していてもこの掘りこみをみる。B-4、C-3、D-3、D-7号等は木での閉塞と推定される。



第32図 伊田孤塚D-5・6号横穴実測図(1/60)

D-1号は閉塞部の直上に花崗岩の底石がのせられている。

墓道はその形状は、全体に不明瞭であるが、D-1号にみるように断面梯形のものがわりと長く続くであろう。

また、羨道および墓道両側に石積み等は全く見られない。

(4) 遺物出土状態

ほとんどが盗掘の著しく、プライマリーな状態での遺物遺存はない。以下主なものについて述べる。

B-1号では前室に須恵器の埴・高杯・長頸壺・平瓶・土師器等々が存した。B-2号は玄室と羨道にて須恵器・杯身・高杯・提瓶・埴・耳環・鉄釵が出土している。B-3号ではやはり玄室・羨道で杯蓋・杯身・耳環が出土した。B-4号は墓道から土器が出土している。D-2号は玄室左側壁下に須恵器・杯蓋・高杯・提瓶・甕と土師器埴がまとまって出土した(図版17-2)。D-5号は墓道からの出土がもっとも多い。

なお、A-2号出土土器のうち須恵器大甕はB-1号玄室出土のものと同接合し、また中形甕はD-5号墓道出土品と、さらに提瓶片がD-2号玄室出土品と同接合している。これは、A-2号、B-1号、D-2号の各横穴が同時併存したことの証左であり、詳しい分析は後考にまわすとしても、土器の供献、剥奪等について示唆するところが多い。

3. 遺物

装身具、紡錘車、鉄器、土器が出土しており、横穴群としては出土量が多い方であろう。

土器については、全体の概要は4-(2)に触れることとし、個々の詳細は表3の土器観察表を参照されたい。

(1) 土器

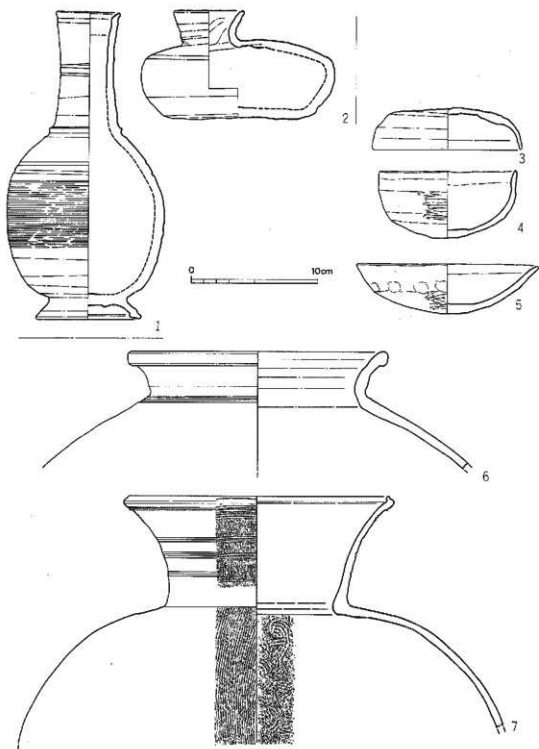
表 3 土器観察表

遺物 番号	器 種	土器の 種類	出土地点	法 量(単位cm) ①口 ②径 ③底 ④高 ⑤底径	調整法及び特徴	備 考	時期
1	水	須恵器	A-1号	①5.1 ②24.1 ③12.5 ④8.4	肩下腹部に刻線へりあり。器底に土系灰土。下腹部に赤褐色斑。灰土を染し、浅褐色斑。細砂粒を若干含む。	全面に自然釉。	
2	平	瓶	A-1号	①5.6 ②8.5 ③15.3 ④12.1	甕部のみ短縮へりあり。他の部分には横ナリ。外壁は赤褐色斑。灰土を染し、浅褐色斑。細砂粒を若干含む。		VI
3	杯	蓋	A-2号 墓 道	①11.8 ②3.2	外壁は赤褐色斑。灰土を染し、浅褐色斑。細砂粒を若干含む。		IV
4	瓶	土師器	A-2号 玄 室	①10.8 ②5.3	外壁の赤褐色斑は灰土を染し、浅褐色斑。細砂粒を若干含む。器底に赤褐色斑。灰土を染し、浅褐色斑。細砂粒を若干含む。	黒光あり。	IV
5	杯	"	A-2号 墓 道	①14.4 ②4	外壁の赤褐色斑は灰土を染し、浅褐色斑。細砂粒を若干含む。器底に赤褐色斑。灰土を染し、浅褐色斑。細砂粒を若干含む。	黒光あり。	IV

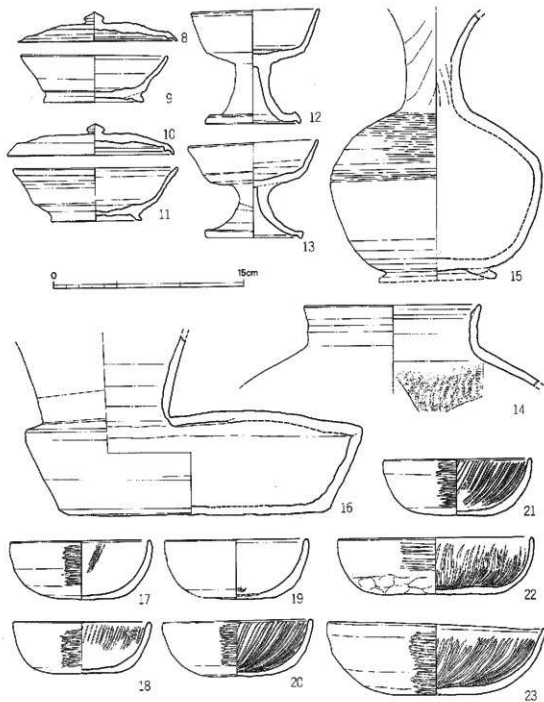
遺物番号	器種	上製の種別	出土地点	法量(単位cm) 口径 口径 高さ ① ② ③ ④ ⑤	調整法及び特徴	備考	時期	
6	甕	須恵器	A-2号 墓道	①20.6	甕部外面はほぼ直線のものを全周より、内面は 斜めに内傾する。甕口内面も、内面は直線、 小砂粒をまわす。			
7	甕	"	A-2号 玄室内	①11	口縁に土着の平付状の突起を、甕部 外面は直線のものを、内面は斜めに内傾する。内面 で、焼成良好。胎土良好。			
8	梅蓋	"	B-1号 前室床No5	①12.6 ②2.35	床付つみの内面は直線へつなり、内面は 直線のものを、胎土良好。胎土良好。		VI	
9	高台付梅	"	B-1号 前室床No10	①11.7 ②3.7 ④8	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎成時の焼きぶくれ。	VI	
10	梅蓋	"	B-1号 前室床No6	①13.2 ②2.5	床付つみの内面は直線へつなり、内面は 直線のものを、胎土良好。胎土良好。	自然焼が付着。 口とセット。	VI	
11	高台付梅	"	B-1号 前室床No3	①13.1 ②4.2 ④7.2	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	自然焼が付着。 口とセット、土器片割着。	VI	
12	高杯	"	B-1号 前室床No9	①10.2 ②8.9 ④7.6	甕部外面は直線へつなり、内面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	自然焼が付着。	VI	
13	高杯	"	B-1号 前室床No4	①10.3 ②7.5 ④7.8	甕部外面は直線へつなり、内面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	自然焼が付着。	VI	
14	短頸壺	"	B-1号 前室床No	①14.1	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。		VI	
15	長頸壺	"	B-1号 前室床No10	①16.6	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	甕部外面は直線のものを、胎土良好。 胎土良好。	甕部外面は直線のものを、胎土良好。 胎土良好。	VI
16	平瓶	"	B-1号 前室床No7	①20.6 ②21.4	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。		VI	
17	梅蓋	土師器	B-1号 前室床No11	①10.1 ②4.65	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	VI	
18	梅蓋	"	B-1号 前室床No12	①11 ②4.05	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	VI	
19	梅蓋	"	B-1号 前室床No11	①11.5 ②4.7	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	VI	
20	梅蓋	"	B-1号 前室床No12	①11.9 ②4.4	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	VI	
21	梅蓋	"	B-1号 前室床No10	①11.9 ②4.45	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	VI	
22	杯	"	B-1号 前室床No12	①15.5 ②4.4	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	VI	
23	杯	"	B-1号 前室	①17.4 ②5.6	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	VI	
24	地蓋	須恵器	B-2号 玄室	①9.5 ②3.65	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
25	杯蓋	"	B-2号 玄室	①11.9 ②9.2	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
26	杯身	"	B-2号 玄室	①10 ②3.05 ④1.7 ⑤0.7	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
27	高杯	"	B-2号 玄室	①10.2 ②9.25 ④7.8	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
28	高杯	"	B-2号 玄室	①10.2 ②9.25 ④7.8	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
29	埴	"	B-2号 玄室No7	①4.7 ②4.05	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
30	埴瓶	"	B-2号 玄室No6	①13.2	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
31	埴	土師器	B-2号 玄室と表座	①6.65 ②11.75 ④13.9	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
32	杯蓋	須恵器	B-3号 玄室No1	①8.9 ②3	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
33	杯身	"	B-3号 玄室No2	①11.2 ②2.9	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
34	高杯	土師器	B-3号 墓道	①15.1 ②10 ④10.85	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
35	高杯	須恵器	B-4号 墓道	①10.5	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IV	
36	埴	"	B-4号 墓道	①9	口縁の内面がつく。甕部外面は直線の もの。胎土良好。胎土良好。	胎土良好。胎土良好。	IIIb	

通称 番号	器 種	上 等 の 種 類	出土地点	法 量(単位cm) ①口径 ②口径 ③胴径 ④底径	調査法及び特徴	備 考	時期
37	甕	須恵器	B-4号 竈道	①7.3 ②8.15 ③14.3	外周部に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
38	甕	須恵器	B-4号 竈道	①15.6 ②13.2 ③13.3	小口であり小口は平直、通しは2段長方形。内面ナシ。小口口に底色を呈し、底色、焼成良好。		IV
39	高 杯	土師器	B-4号 竈道	①15.6 ②13.2 ③13.3	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
40	高 杯	須恵器	B-5号 穴窯断面	①13.6	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
42	甕	須恵器	B-5号 穴窯断面	①25.3	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
43	杯 身	土師器	C-4号 竈道	①14.8 ②4.1 ③10.0 ④4.4	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
44	甕	須恵器	C-4号 竈道	①15.6 ②12.4 ③14.4	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
45	杯 蓋	須恵器	D-1号 竈道	①15.6 ②12.4 ③14.4	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
46	杯 蓋	須恵器	D-1号 竈道	①15.6 ②12.4 ③14.4	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
47	高 杯	須恵器	D-1号 竈道	①15.6 ②12.4 ③14.4	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
48	高 杯	土師器	D-1号 竈道	①15.6 ②12.4 ③14.4	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
49	高 杯	土師器	D-1号 竈道	①15.6 ②12.4 ③14.4	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
50	杯 蓋	須恵器	D-2号 玄室	①10.8 ②3.3	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
51	杯 蓋	須恵器	D-2号 玄室	①11.3 ②3	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
52	杯 蓋	須恵器	D-2号 玄室	①11.4 ②3.4	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
53	杯 身	須恵器	D-2号 玄室	①8.9 ②2.9	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
54	杯 身	須恵器	D-2号 玄室	①10.8 ②2.8	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
55	杯 身	須恵器	D-2号 玄室	①10.4 ②2.7	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
56	杯 身	須恵器	D-2号 玄室	①9.8 ②2.9	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
57	有蓋高杯	須恵器	D-2号 玄室	①16.7	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
58	有蓋高杯	須恵器	D-2号 玄室	①15 ②18.8 ③15.1	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
59	提 瓶	須恵器	D-2号 玄室	①7.6 ②22 ③10.3	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
60	甕	土師器	D-2号 玄室	①18.2 ②6.2	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
61	甕	土師器	D-2号 玄室	①9.5 ②4.9	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
62	甕	土師器	D-2号 玄室	①7.1 ②4.9	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
63	甕	土師器	D-2号 玄室	①7.2 ②5.1	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
64	甕	土師器	D-2号 玄室	①6.6 ②4.9 ③10.7	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
65	甕	須恵器	D-3号 竈道	①8.4 ②5.6 ③10.7	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
66	高 杯	土師器	D-3号 竈道	①13.6	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV
67	杯 蓋	須恵器	D-4号 玄室	①13.6	口部の内面に細線が二つあり、この部分の内面はナシ。底は緩子。底色を呈し、焼成良好。小砂粒を含む。		IV

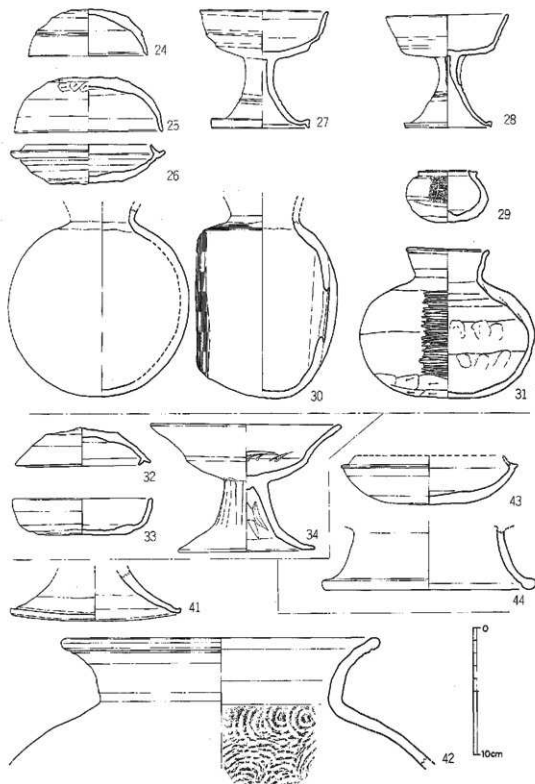
通物 番号	器 種	土器の 種類	出土地点	法 量(単位:cm) ①口径 ②口径 ③口径 ④口径	調査法及び特徴	備 考	時期
68	甕	須恵器	D-4号 玄室	①12.6 ②13.7 ③ 9.4	胴部中ほどに浅彫の入り、この部分より下はへら削りによる小凹部。胴部内外に浅彫の入り。底面は平ら。	円孔をあけた際の残が胴 内に入ったままである。	IV
69	鉢	土師器	D-4号 玄室	①16.5 ②10.0	内面は底1.5cmより下の縁部に入るまで、浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。		
70	甕	"	D-4号 玄室	①17.1	胴部外面は底の底へへら削り。内面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。		
71	埴 土	須恵器	D-5号 玄室	①10.4 ② 2.7	外弁部外面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
72	杯 蓋	"	D-5号 玄室	① 8.5 ② 2.8	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		V
73	杯 蓋	"	D-5号 浅道床面	①13.9 ②14.35	外縁の外面のふちへへら削り。底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。	74とセット。	IV
74	杯 身	"	D-5号 浅道床面	①12.3 ②14.45	外弁部の外面のふちへへら削り。底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。	73とセット。	IV
75	杯 身	"	D-5号 玄室	①11.6 ② 3.7	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
76	高 杯	"	D-5号 浅道床面	①11.2 ②14.25 ③11.6	胴部中ほどに浅彫の入り。これより上はへら削り。底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
77	高 杯	"	D-5号 浅道	① 9.5 ② 7.9 ③ 7.7	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
78	直口 甕	"	D-5号 玄室	① 8.6 ②15.2	胴部外面は浅彫の入り。底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
79	埴 土	"	D-5号 玄室	③14.8	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
80	直口 甕	"	D-5号 玄室	③18.1	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
81	提 瓶	"	D-5号 浅道	① 7.2	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
82	提 瓶	"	D-5号 浅道	③11.4	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
83	高 杯	土師器	D-5号 玄室	① 7.3 ②19.5 ③14.6	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。	胴部外面にX印のへら削り。	IV
84	提 瓶	須恵器	D-6号	① 8.4	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
85	壺	"	D-6号 浅道	①14.5 ②3.65	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。	大弁部外面にX印のへら削り。	IIIb
86	杯 蓋	"	"	① 9.2	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
87	高 杯	"	"	①12	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
88	高 杯	"	"	③ 9.7	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
89	甕	"	"	① 6.5 ②13.2 ③12.5	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
90	平 敷	"	"	① 9.9 ② 4.7 ③10.5	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
91	埴 土	"	"	①14.3	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
92	高 杯	土師器	"	① 5.9 ②6.95 ③ 8.1 ④ 4	底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。		IV
93	壺	須恵器	"		底面は浅彫の入り。底面は平ら。赤褐色で焼成良好。小砂粒を多く含む。	江戸時代か	



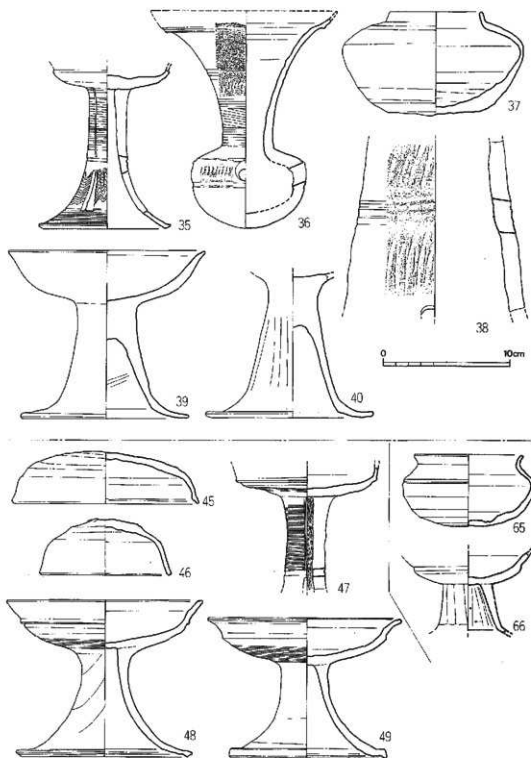
第33図 伊田孤塚出土土器実測図①(1/3)



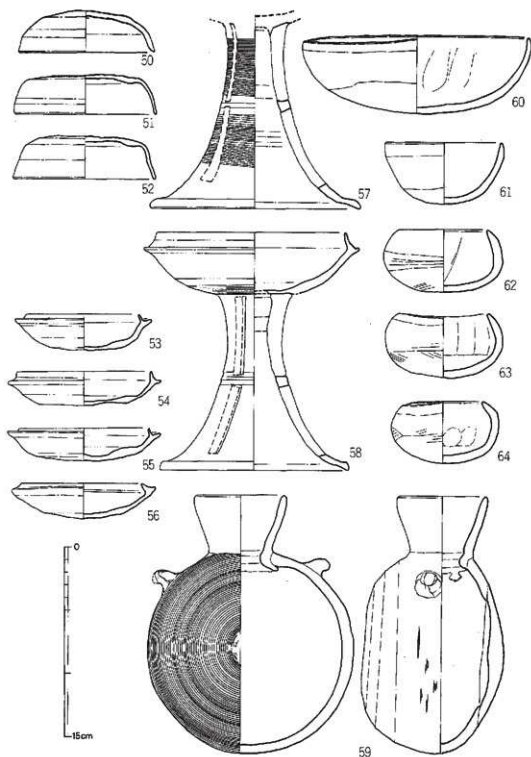
第34图 伊田孤塚出土土器実測图②(1/3)



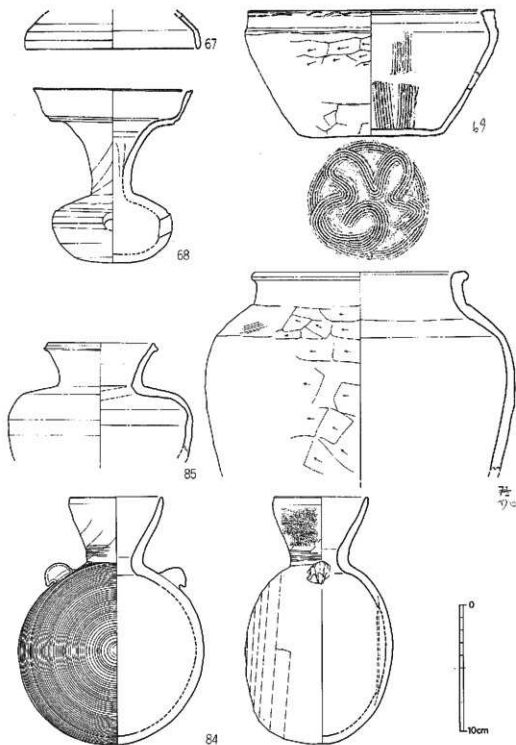
第35圖 伊田塚出土土器実測圖③(1/3)



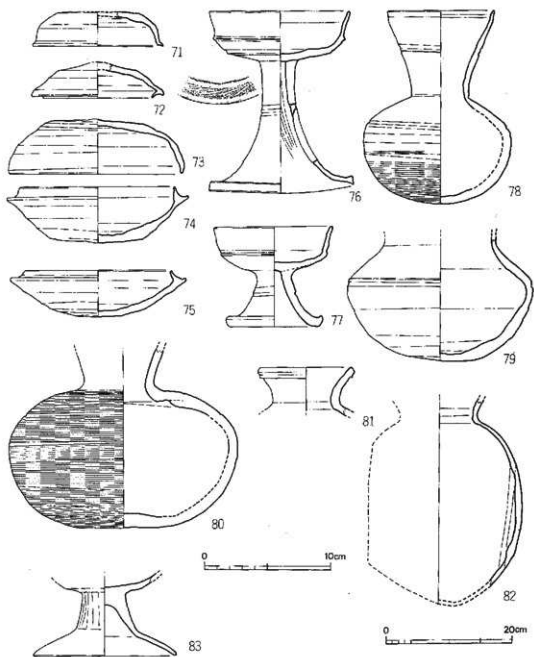
第36図 伊田孤塚出土土器実測図④(1/3)



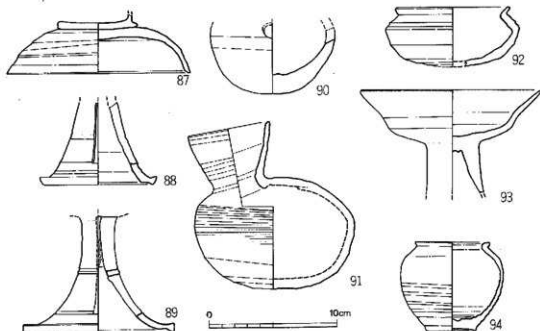
第37図 伊田孤塚出土土器実測図⑤(1/3)



第38図 伊出孤塚出土土器実測図⑥(1/3)



第39図 伊田冢出土土器実測図⑦(1/3) (1/6)



第40図 伊田塚出土土器実測図⑧(1/3)

(2) 装身具(第41図)

耳環 5基の横穴から10個が出土した。すべて中実の銅地で、金・銀・金銅張りのものがほとんどである。外径が2.29cmのふつうの大きさから33.1cmを測る大形のものまである。全体に遺存状態は良好とはいえない。計測値等は表4を参照のこと。

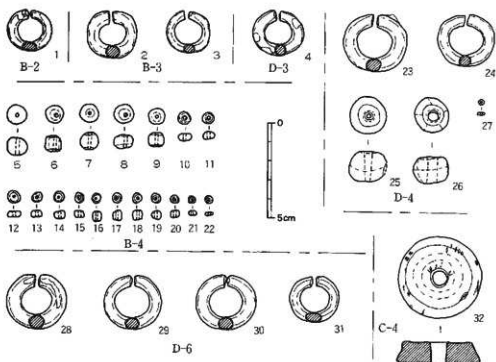
表4 耳環計測表

出土横穴	第41図	最大幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)	つくり
B-2号 玄室	1	22.9	7.3	9.3	銅地金銅張り
B-3号 羨道	2	27.1	7.5	10.7	銅地
" "	3	22.9	5.7	6.0	銅地金銅張り
D-3号 玄室	4	26.3	5.4	9.8	銅地銀張り
D-4号	"	23	33.1	7.7	25.3
" "	"	24	29.8	5.7	11.7
D-6号	"	28	31.0	8.5	20.5
" "	"	29	30.8	7.5	20.2
" "	"	30	30.8	7.8	18.4
" "	"	31	25.9	7.7	13.7

玉類 B-4号、D-4号の2基からガラス玉・土製丸玉の出土をみる。D-4号出土の大きなガラス玉2個は25が高さ1.5cm、幅1.97cm、26は高さ1.36cm、幅1.72cmを測る。27は高さ0.18cm、幅0.34cm。B-4号出土のガラス玉34個、土製丸玉44個は表5を参照。

(3) 紡錘車(第41図)

C-4号の玄門閉塞右側の羨道から出土した。きわめて軟かい滑石製で、高さ1.07cm、最大



第41図 伊田孤塚出土装身具・紡錘車実測図(1/2)

表5 伊田孤塚B-4号出土土類計測表

No.	高さ(長さ)	幅	色 調	cf.	No.	高さ(長さ)	幅	色 調	cf.
1	9.2	9.9	灰黒色	第41図-5	19	8.7	8.8	灰黒色	
2	8.5	9.8	"	第41図-6	20	8.8	9.0	"	
3	8.7	9.7	"	第41図-7	21	7.9	8.7	"	
4	6.9	10.0	灰白色	第41図-8	22	8.4	9.7	"	
5	7.2	8.0	灰黒色	第41図-9	23	8.2	9.0	"	
6	8.4	9.7	灰白色		24	8.1	8.9	"	
7	8.4	9.8	"		25	8.8	8.8	"	
8	8.0	9.4	"		26	7.6	8.6	"	
9	7.4	9.3	"		27	7.9	8.9	"	
10	8.8	9.7	"		28	8.7	8.7	"	
11	8.0	9.2	"		29	8.6	8.3	"	
12	7.9	9.0	"		30	7.8	8.4	"	
13	8.0	8.9	"		31	8.3	8.3	"	
14	7.2	8.1	"		32	8.4	8.9	"	
15	8.7	9.5	灰黒色		33	7.7	9.3	"	
16	8.3	9.8	"		34	7.5	8.8	"	
17	8.9	9.2	"		35	8.0	9.2	"	
18	8.2	8.8	"		36	7.2	8.5	"	

№	高さ(長さ)	幅	色 調	cf.	№	高さ(長さ)	幅	色 調	cf.
37	8.0	8.7	灰 黒 色		60	3.7	5.3	ライト グリーン・ブルー	第41図-14
38	7.6	7.9	"		61	4.0	4.5	グリーン・ブルー	第41図-15
39	8.6	9.4	"		62	3.0	5.4	ライトグリーン	
40	7.4	8.8	"		63	3.0	5.0	"	
41	7.3	8.0	"		64	2.9	4.7	ライトブルー	
42	7.8	8.6	"	部欠損	65	3.6	4.4	"	
43	7.9	8.9	"	"	66	4.4	5.2	群 青 色	第41図-16
44	9.3	9.0	"	"	67	3.0	5.7	"	第41図-17
45	3.9	6.9	グリーン	第41図-10	68	5.3	4.6	ライトグリーン	第41図-18
46	4.3	6.0	"	第41図-11	69	4.2	4.9	ライトブルー	
47	3.8	6.2	"		70	4.9	4.8	"	第41図-19
48	3.4	6.2	"		71	4.9	5.4	"	
49	4.5	6.1	"		72	3.5	5.3	"	
50	4.8	6.1	"		73	3.8	4.6	"	
51	4.4	5.9	"		74	3.3	3.9	"	第41図-20
52	4.0	5.9	"		75	2.7	3.8	ライトグリーン	第41図-21
53	4.5	5.8	"		76	3.2	3.9	"	
54	3.3	6.2	"		77	2.0	4.1	ライトブルー	第41図-22
55	3.9	6.7	"		78	2.7	3.7	"	
56	3.9	5.7	"		すべて丸玉および小玉である。				
57	3.2	5.5	"		44まで土製丸玉				
58	3.0	6.8	ライトブルー	第41図-12	45-78はガラス玉				
59	3.6	5.7	グリーン・ブルー	第41図-13	計測値は単位mm				

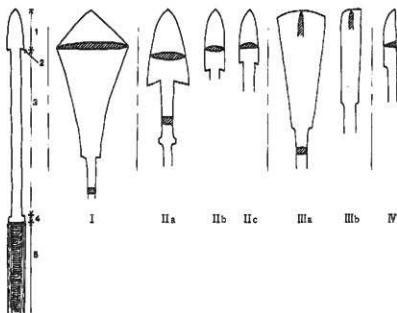
径4.33cm、孔径0.75cmと0.90cmを測る。34.2g。所々に擦過痕をみる。

(4) 鉄 器 (第43-46図)

16基のうち10基から武器(鐵・矛・刀・石突)、用具(刀子・斧)、農具(鎌)、馬具(兵庫鎖・雲珠・留金具)の各種の鉄器が出土したが、鎌が最も多く刀子がこれに次ぐ。ほとんどが錆化著しく遺存状態はあまりよろしくない。D-4号は玄室規模が他に比して大きい、出土鉄器の数量も他より卓越している。以下、横穴毎に述べるが、出土位置は特に記さないものはすべて玄室からである。

なお、鉄鐵の各部分名称については正式呼称を知らないが、ここでは説明の便宜上次のようにしておく(第42図)。①刃部あるいは身。②閃。逆刺となるものもある。③軸。④軸環。輪状でなく三角形に段がつくものも同じ。⑤鉄本体は茎で、それを巻いた糸あるいは被っている竹、および木皮等々をひっくるめて莖被。

さらに、型式名については後藤守一・永末雅雄氏等の分類があるが、ここではとくに逆刺の有無や細かい箇所が錆のため判然としないものもあるため、厳密な分類呼称をやめて、大まかに第42図に示す形態分類にとどめたい。I類は定角形をなし、II類は長三角形で、IIbは肉丸造、IIcは片丸造となる。III類は斧箭式で、IIIaは主頭形および円頭形をなす。IIIbは方頭形。IV類



第42図 鉄剣型式模式図

は片刃式。

B-2号(1)

IIIa類の鐵で、
茎に木質の遺存
をみる。現存長
8.9cm。

B-4号

鐵・矛・鐔・
斧が出土してい
る。鐵は最低10
本は存し、IIIa類
(2) IIIb類(3)と
IIc類(4-7)、
IV類(8)の3種が
ある。完形品は
ない。5は軸長

9.5cm、茎は5-7cmを測る。矛(14)は全長21.7cmで、刃部断面は菱形を呈する。袋の部分はどこまでなのかわからないが、折り曲げた様子がみえないのであるいは鋳造品か。内部に木質が鋳着しているので柄を着装していたことが知られる。15・16は大刀の鐔で、15の鞘口金具は鋳着していた訳ではないが恐らくこのようにとりつくものと解される。復原径8.1cm、16にも鞘に金具が接着していた痕跡をみる。

斧(17)は全長8.8cmを測り、折り曲げた袋部内面に木質が遺存する。刃部幅3.4cm。

C-4号(18-29)

鐵と刀子がある。鐵(18-28)は最低10本あってIIc類(18・19)IV類(20-25)の大きく2種に分かれる。筥は茎の上に何か纖維質のものを巻き、それを竹か木で被って、さらに上に木皮を巻きつけているようにみえる。18の復原長14.2cm。

刀子(29)は茎に木皮を巻きつけ、その上に鹿角を装している。

D-1号(30-33)

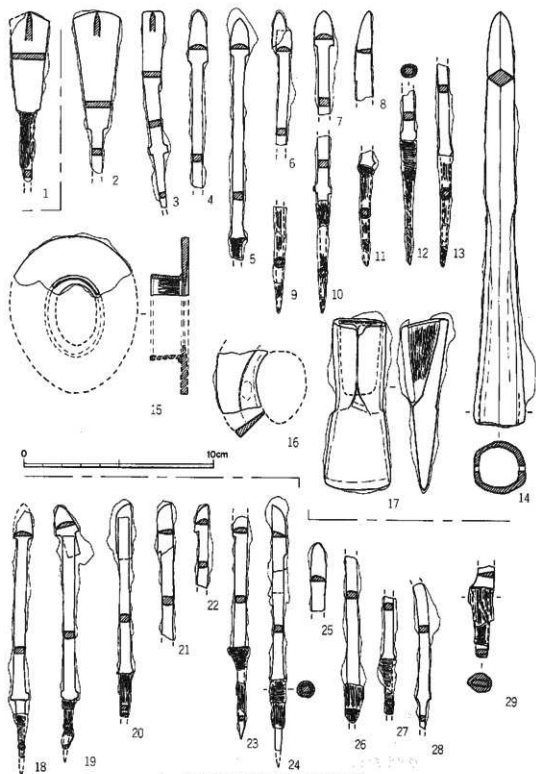
鐵と刀子それに不明鉄器片がある。鐵(30)は茎の部分のみ。

刀子(31)は身の長さ13.6cm。柄に木質が若干残る。

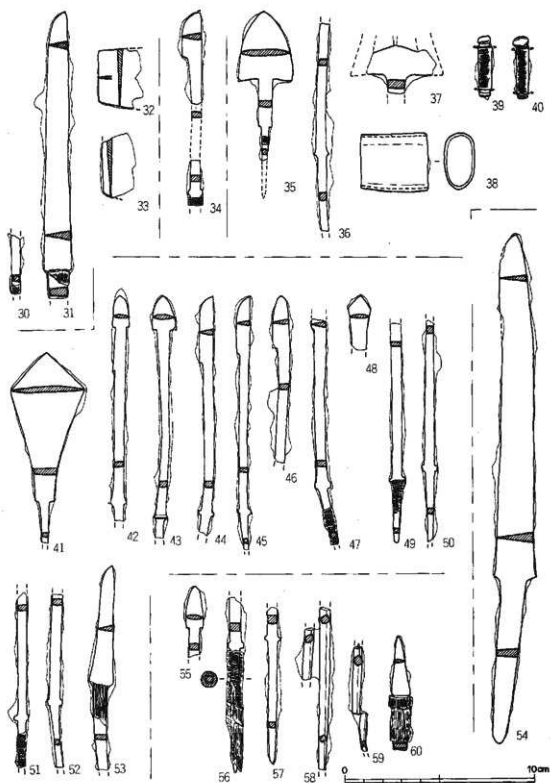
32・33は同一個体の破片らしいが何の一部であるかわからない。刃部を有する。

D-2号(34)

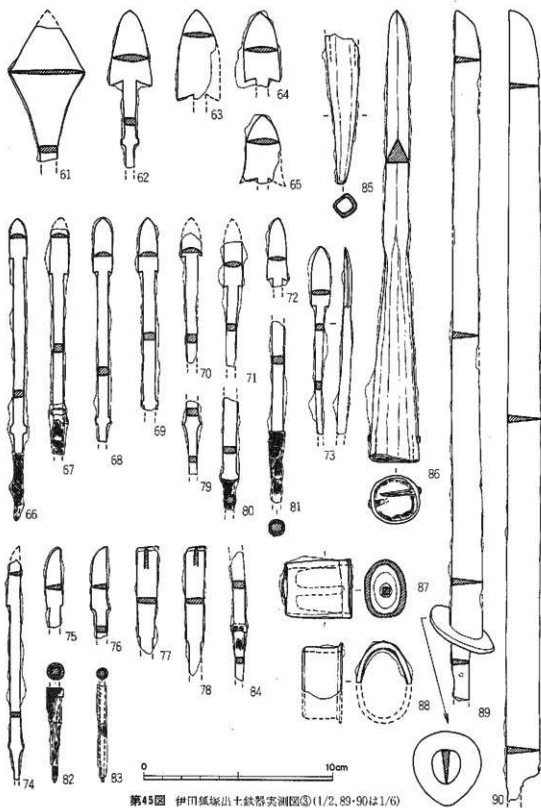
鐵はIV類で、刃部長2.4cmを測る。



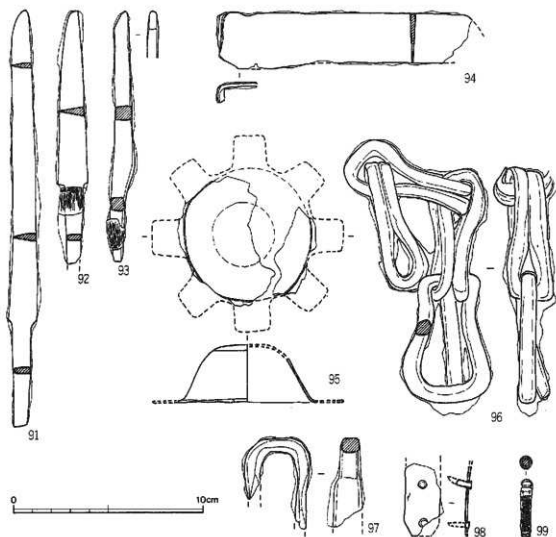
第43图 伊豆塚出土鉄器実測図①(1/2)



第44图 伊用孤塚出土鉄器実測図②(1/2)



第45図 伊田冢出土鉄器実測図③(1/2, 89・90は1/6)



第45図 伊田孤塚出土鉄器実測図④(1/2)

D-3号(35~40)

鍔と鞘金具、留金具がある。鍔(35~37)は35がIIa類で全長10cmはこえるまい。37は羨道から出土したが、IIa類で透しの入るものであろう。鞘金具(38)は鞘の口か尻か定かでない。長さ3.6cm・長径3.0cmを測る。

39・40は両頭座金付留金具(註1)と称されるもので双方とも錆が著しく細部の様相は不明であるが、花卉形に開く所に張まれた部分(仮に体部とする)は横方向に走る繊維質の有機物が付着している。全長3.2cmで、体部長は2.2cm、体部径0.7cm。「武器・武具に関連した工芸品に

使用されたもの」(註2)とする考えが示されているが、銅金物の可能性が高い。

D-4号(61~99)

鐵・石突・矛・大刀・刀了・鎌・馬具類がある。鐵(61~84)は19本以上存し、I~IV類のすべてを含む。I類(61)の刃部はごくすい。IIa類(62~65)はみな逆刺をもつようだ。73はIIb類と思われるが、若干の湾曲もあって鎌以外の用途があるかもしれない。IIIb類の77、78は刃部長5cm前後。完形品である66は全長15.8cm。石突(85)は現存長7.8cmで断面は隅門の方形に近い。矛(86)は全長23.7cm、刃部長12.5cmを測り、刃部断面は三角形をなす。袋部内には木質が付着し、柄の着装を知る。また、目釘も2本が残っている。袋部の合せ目は確認できず銕造かもしれない。87・88は騎金具で87が鞍尻・88が鞍口にあたるものであろう。87は鞍木を突きさす釘が残る。人刀(89・90)は2本とも玄門付近の埋土中に鎌を玄室に向けて突きささる如き状態で出土した。89は長径7.9cm、短径7.2cmの射形をなす鈎がくつついたままで、この鈎に透し等はみられない。刃部長65.9cm・闊幅3.3cm・背幅0.7cmを測る。茎は折損するも目釘孔1個がみられるようだ。90は刃部長80.2cm・闊幅3.5cm・背幅0.7cmを測る。闊と茎の間には小さな段を有する。

刀子(91・92)は91が通常のものより大きめで全長21.8cm、刃部長16.2cmを測る。茎に目釘孔らしきものは見当たらない。あるいは小刀として扱った方がよいかもしれない。92の茎には木質が付着し、刃部長9.0cm。

93は全長13.1cmを測るもので、恐らくのみとしてよいであろう。茎と身の間には屈折した段があるのみで闊等はみられない。茎には鹿角らしきものの銕着をみる。

鎌(94)は復原全長14.5cmくらいで、基部と刃部の境は明瞭でない。ただ、背の方には折り返しから1.5cm程に僅かなくはみることができ、柄を緊縛するためのものであろう。この折り返し方でいけば、右利きの人が使用するためには鎌が上から柄をとりこむような形、つまり、柄は鎌によって一部隠れることになる。左利きの人が使用すると、そのまま反対に裏返せばよい。

馬具には雲珠(95)、兵庫鎖(96)、留金具(97・98)、不明品(99)がある。雲珠は破片で全体を復するには危険も多いが、およそ図の如くとなろう。鍔金等の痕跡はみられない。鍔を垂下した兵庫鎖は鉄棒を2重に折り曲げたものが3連となり、その先に鉸只がつく。いま銕着しているものをばらして垂下すれば全長27cm程になる。97は鍔の最上端にあたり、96の兵庫鎖と連結しうものかも知れない。98も鍔の縁金具で、鍔2個がみえる。99の留金具はD-3より出土品より細めで、長さ3.1cmを測る。

D-5号(41~53)

鐵と刀子がある。鐵は最低11本はあって、I類(41)、IIb類(42・43)、IV類(44~46)の3種がある。48はI類の小形とするよりIIb類の変形としたがよからう。全長の知れるものはな

いが42の軸長 9.2cmを測る。また、42は軸の片方に逆刻をもつらしい。

刀子 (53) は刀部長 6.1cmで全長が11cm強となろう。茎には木質をみる。

D-6号(54)

小刀1本がある。全長26.8cmで刀部長18cmを測る。刀部は鋒に向かって内反りしてゆく。目釘孔らしきものは見当らない。

D-7号(55~60)

鍔4本分と小刀子がある。鍔(55~59)は55がIIb類で、他は茎から軸の部分のみで型式不明。56は莖被には竹とその上に桜皮らしきものをみる。

60の小刀子は全長 5.9cmで、身と茎がほぼ同じ長さになっている。刃部は明確に刃として尖ってはいないようだ。茎には彫角が遺存している。

4、小 結

(1) 横穴の構造

当横穴群で構造的に特別なものというのは見当らないが、ただ複室構造の例をひとつ加えた。これまでに複室構造の横穴が知られているものに次がある。

小池横穴群(註3) (飯塚市)	土師遺跡群第10地点(註7) (嘉穂郡桂川町)
森原1号横穴(註4) (嘉穂郡穂波町)	羅漢山横穴(註8) (中間市)
九郎丸横穴群(註5) (嘉穂郡桂川町)	経塚横穴群(註9) (田川市)
八王寺横穴群(註6) (嘉穂郡桂川町)	

複室構造をとるからといって、その横穴群中において特別な位置を占めるとも思われず、ただ単に横穴式石室の(もちろん複室の)影響下に、第一義として埋葬空間の拡大をはかったものと思われる。ただ、経塚横穴群中には複室構造をとる巨大な横穴があり、これの占める位置というのはまた別に考えねばならないだろう。

上記の、現在までに知られている複室構造の横穴の分布を見れば、田川地方(豊前)よりも嘉穂地方の方が密度が濃いようである。因みに、1,000基に迫る横穴群が調査された竹並遺跡(註10)では、複室になるものは1基もみられない。

次に、D-3~6号横穴は一墓道でつながる一群のものとして扱えられるが、この中でD-4号は規模・出土遺物において他を圧しており、これが盟主的地位を占めたことは疑いないとみてよい。

(伊 崎)

(2) 出土遺物概説

表6 伊田風塚横穴群一覽表

(単位はcm)

横穴	上軸方位	平面形	立面形	全長	墓			築造	敷石	後遺幅	須知の時期	備考
					長	奥室(側)	玄門(側)					
A-1	S 62°W	(羽子板形)	家形	—	75+	174	—	○	—	—	VI	—
A-2	S 21°W	横長方形	家形	304	200	240	240	140	○	91	IV, VI	玄室中央に溝 工具痕あり
B-1	S 70.5°W	横長方形 <正方形>	"	458	117	200	183	107	○	112	VI	横室構造 <く>は前後の計測値
B-2	S 51°W	横長方形	家形	312+	167	207	185	114	○	117	IV	—
B-3	S 31.5°W	"	"	270	147	189	174	111	○	81	IV	工日不明 南面石あり
B-4	S 50°W	"	ドーム	305	177	213	211	120	○	72	III B, IV	後遺中央に溝 附築石あり
B-5	S 38°W	"	家形	193+	144	200	(165)	110	なし	—	IV	—
C-3	S 38°W	長方形	"	195	170	150	130	(105)	なし	34	—	—
C-4	S 51°W	"	"	275	188	180	148	(120)	○	43	IV	玄室中央に溝 附築石あり
D-1		横長方形	アーチ	371	157	190	188	89	なし	51	III B, IV	庇石あり
D-2	N 10°E	長方形 or 正方形	ドーム	—	(175)	158	(170)	(120)	なし	—	IV	—
D-3	N 60°E	羽子板形	"	328	167 (270)	225	175	98	○	88	IV	工具痕あり
D-4	N 30°E	"	家形	455	328	292	248	(205)	○	63	IV	玄室中央に溝
D-5	N 13°W	"	"	517	274	232	207	135	○	76	IV, V	玄室に段あり 下段痕あり
D-6	N 13°W	"	"	335	145 (225)	200	140	114	なし	100	IV	玄室に段あり 工具痕あり
D-7	N 5.5°E	正方形	ドーム	230	190	176	160	108	○	38	—	工具痕あり

● 方位は開口する方へのもの。

● 玄室長は玄門中心を通る主軸にて計測

● 全長は端点を除く。

● 玄室高は最大、後遺幅は最小の値

a、土器について

今回調査した横穴16基から総数66個体の須恵器と26個体の土師器が検出された。横穴は盗掘が著しいため、玄室内からの出土は少なく、墓道、羨道部からの出土が多かった。このうちB-1号とD-2号横穴の玄室からは追葬時のものと思われる土器がまとまって出土した。B-1号出土品のうち平瓶(16)は浮遊した状態であり、時期を異にする。土師器碗は暗文を施した丁字なつくりであり、貴重である。各横穴出土品の須恵器の時期は第4表の如くであり、小山富士雄氏編年によるⅢB期・Ⅳ期・Ⅴ期・Ⅵ期・Ⅶ期のものが出土した。このうち最も多い時期はⅣ期であり、ⅢB期のものとしてはB-4号出土の鉢(36)とD-1号出土の杯蓋(45)、それに表採資料の杯蓋(86)である。

Ⅳ期については杯蓋、杯身が若干検出されている。天井部及び底部外面の調整法は回転ヘラ削り、静止ヘラ削り、木調整のままのものなどがあり、一定しない。口径11cm前後の杯で、未調整のため粘土紐のなきあけ痕が顕著に見られるものがある。口径に大小の二種類あり、A・Bに分類できよう。高杯については有蓋高杯と無蓋高杯があり、無蓋高杯は長脚と短脚の二種類があり、長脚のものはいずれも上下2段に透しが入る。透しは、上段は貫通させてはいるが線刻状のものと完全に透孔をあけた長方形のものがみられる。線刻状のものは透しの退化形態と考えられる。短脚のものは脚柱中ほどに沈線を配する。有蓋高杯については杯部の立ち上り形態からⅣ期としたが、これはⅣ期でも前半期のA期に属するものである。

Ⅴ期の杯については身と蓋の逆転が見られ、小型化が著しい。

Ⅵ期としてB-1号出土品を検討する。高杯においては杯部はまだ小さいままなど、Ⅵ期でも古い様相をもち、脚柱部に沈線を配さない点をのぞけばⅣ期のそれと際立った差異は見られない。碗においては体部と底部の境に段をもつ点など古い様相を保っている。これからの須恵器はⅥA様式に属するものである。高台付碗の出現について、小田富士雄氏は天観寺山窯跡群(註11)の調査で「埴形土器は従来の7世紀後半代(第Ⅵ様式期)から6世紀後半代(第ⅣA様式期)にまでさかのぼることが確かめられたこと。しかし第Ⅵ様式期との間にかなり顕著な差違を認めることができることなどを指摘することができた。」として埴形土器について豊前地方では筑前・筑後地方と様相を異にすることを指摘された。当該横穴出土の土師器は内外面ともヘラ磨きし、暗文を有する一括品であり、前述の碗と相伴している。杯22・23の径高指数はそれぞれ28.4と32を示す。これは飛鳥・藤原宮の土器編年(註12)のⅡ期(23)とⅢ期(22)に属するものである。Ⅱ期は7世紀前半に比定されているが、当該遺跡・出土品は少しくずれた感があり、Ⅱ期としても地域差や、22の土器との供作を考慮すれば7世紀中葉代を前後するものと考えられる。これは須恵器碗の形態と合わせても矛盾が少ないようである。

当該横穴出土土器から見た横穴の年代は、6世紀後半に築造を開始されており、6世紀末にその最盛期を迎え、7世紀中葉～8世紀前半頃まで追葬が行なわれていたと言えよう。A-1

号出土の水瓶(1)はその時期決定に苦しむが、平安時代初頭頃であろうか。とすれば、この時まで追葬が行なわれていたと考えるには無理があり、横穴を再利用した葬法を考えるべきであろう。(川 達)

b 鉄器等について

横穴墓としては土器以外の鉄器・装身具等の出土は割合に多い方とみてよい。鉄器については武器である刀・矛・鏃などは他の横穴群においても多く出土するが、馬具はそう大量に見るものではなからう。既知のものを列記すれば次のようになる。

小牧西半田(註13)(鞍手郡鞍手町) - 鞍金具・髀	宮ノ上5号(註17)(嘉穂郡穂架町) - 髀
古月(註14)(鞍手郡鞍手町) - 髀	九郎丸横穴群(註18)(嘉穂郡桂川町) - 髀
瀬戸1・2・14号(註15)(中間市) - 引手・鉸具・辻金具・髀	竹並(註19)(行橋市) - 20基余りの横穴から
小池17-2号(註16)(飯塚市) - 髀	留金具・踵・髀・鉸具・胸髀・帯金具等をみる。

以上のうち、ほぼ光堀に近い竹並遺跡での馬具出土の横穴をみても、その横穴が群中での立地・規模等において他と何らかの差異をみるかというところでもないらしい。しかし、当狐塚横穴群で馬具を出土したD-3号、D-4号については、特にD-4号は全体の中でも中心的地位を占める横穴である。竹並遺跡のように莫大な数の築造をみる横穴群と、この狐塚横穴群とでは自ずと形成基盤に差異をみるが、少なくとも狐塚においては馬具を持ちうることは即ち他を凌ぐ力を持つことの証明であった、と考えられる。

次に、C-4号から紡錘車が出土しているが、他には、宗像市久戸5号(註20)、飯塚市池田(註21)、田川郡人任町狐塚(註22) IV-4c・III-2、鞍手郡鞍手町古月(註23)、北九州市本城(註24)、行橋市竹並(註25)、田川市清瀬(註26)等からの出土が知られている。

また、D-4号出土の鉄矛は、身の断面が三角形を呈するものであり、寡聞にして多くの類例を知らないが、粕屋郡宇美町観音浦ks3号(註27)、同古賀町原口1号墳(註28)に同類のものを見る。(伊 崎)

註1 市毛龜「古墳出土の鉄製留金彫小品について」(『古代学研究』87 1978)

註2 註1に同じ

註3 飯塚市教育委員会「小池横穴群」(『飯塚市文化財調査報告書』第5集 1981)

註4 児嶋隆人・森田等編『嘉穂地方史 先史編』1973

註5 石塚彦彦「出雲穴」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第三輯 1928)

註6 『桂川町誌』1967

註7 桂川町教委・長谷川清之氏教示。

註8 小田富士雄他「原始・古代・中世篇」(『中間市史 上巻』1978)

註9 大任町教育委員会「大任町横穴群」(『大任町文化財調査報告書』第3集 1979)

註10 竹並遺跡調査会「竹並遺跡」1979

註11 『天鏡寺山笠群』1977 北九州市埋蔵文化財調査会

- 註12.『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』 1978 奈良国立文化財研究所
- 註13.鞍手町教育委員会「小牧西牟田横穴群」(『鞍手町文化財調査報告書』第1集 1981)
- 註14.石塚常彦「古月百穴」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第三輯 1928)
- 註15.『中国市史』上巻 1978
- 註16.飯塚市教育委員会「小池横穴群」 1981
- 註17.福築町教育委員会「福築公園内遺跡」(『福築町教育委員会調査報告書』第1集 1975)
- 註18.石塚常彦「出雲百穴」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第三輯 1928)
- 註19.竹並遺跡調査会「竹並遺跡」 1979
- 註20.宗像町教育委員会「久戸古墳群Ⅱ」(『宗像町文化財調査報告書』第3集 1980)
- 註21.飯塚市教育委員会「池田横穴群」 1978
- 註22.大任町教育委員会「狐塚古墳群、同Ⅱ」(『大任町文化財調査報告書』第1・2集 1976、'78)
- 註23.註2に同じ
- 註24.島田寅次郎「福岡県の横穴」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第九輯 1934)
- 註25.註7に同じ
- 註26.本報告所収
- 註27.宇美町教育委員会「宇美観音浦」1981
- 註28.福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」 1974

Ⅵ. お わ り に

本報告書は、3群の遺跡の発掘調査概要を報告したものであるが、とくに緊急的に調査したもので、工事中に破壊された遺構も多く、遺物のみが採集されたものもある。

夏吉古墳群では、カネヒラ地区に分布する古墳群中4号墳が巨石を使用した石室であったために石室の破壊は免れていたが、4-2号墳のような小型の石室墳が実在するところから、間壁等で破壊された古墳が数基存在した可能性が考えられる。4-1号と4-2号墳の時期差から考えてもその可能性は強い。

清瀬・狐塚両横穴群の調査においても、地形的に危険性や周囲環境から発掘調査に大きな制約があり、完全な調査ができなかったが、これらの地区は未調査の地区であり、一応の成果を取ることができた。

最後に、本報告書では予算の関係上、印刷費に多くを費やすことができず、遺物写真を完全に制約せざるを得なかったのが残念であるが、これは破壊され消滅した遺構の図面・写真を省略するよりは、保存できた遺物は希望さえすれば実見できると考えたからである。

なお、遺物は田川市教育委員会が保管する。



1

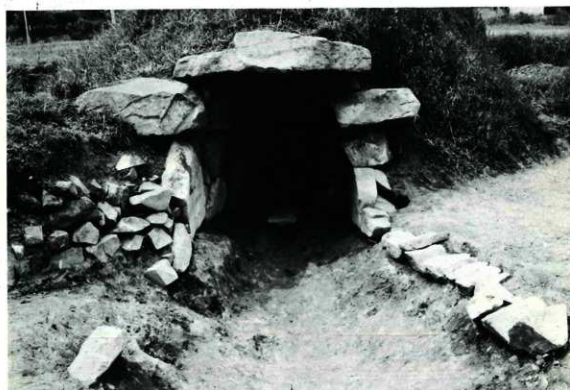


1 夏吉4-1号墳（発掘前）

2 発掘後（南から）

3 発掘後（北から）

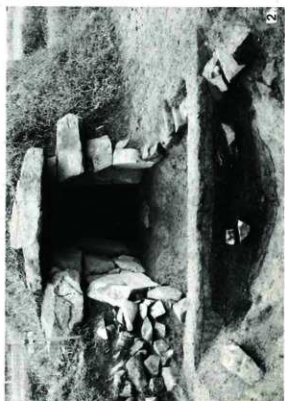
図版 2



1 夏吉 4-1 号墳 (北東から)

2 墳丘断面

3 墓道と羨道



3 狭道 4 玄門

1 夏古4-1号墳の閉塞石 2 墓道の土層断面



1 夏吉 4-1 号墳玄室西壁

2 前室甬石

3 甬壁上部

4 甬壁下部



1 夏吉4-2号墳の墳丘と墓道

2 石室と敷石

図版 6



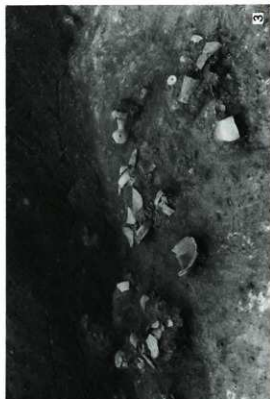
1 清瀬A-1号横穴

2 A-2・3号横穴



1 清湖A-3·4号横穴

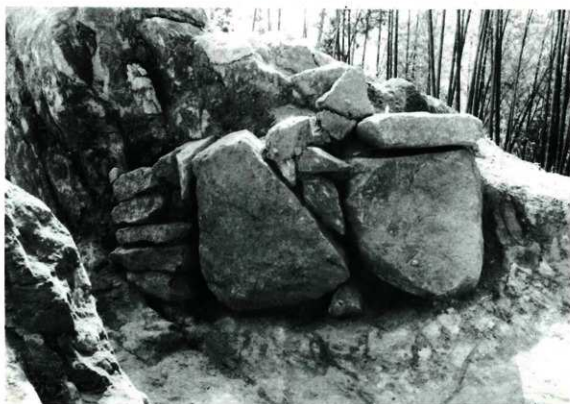
2 A-5号横穴



1 清瀬B-1～3号横穴墓道の横断土層

2 B-1号横穴の墓道

3 B-2号前庭の遺物



1 清瀬B-1～3号の墓道・前庭部

2 B-1号墓道の側壁



1 清瀬B-2号前庭部の土器



2 B-3号墓道



3 B-3号墓道



4 B-3号墓道の竈穴



1 清瀬B-4・5号横穴



2 B-5号玄室



3 B-5号玄室の土器



4 B-5号玄室の甬と耳環

図版12



1



1 清瀬B-4号横穴全景

2 B-4号横穴の鉄刀



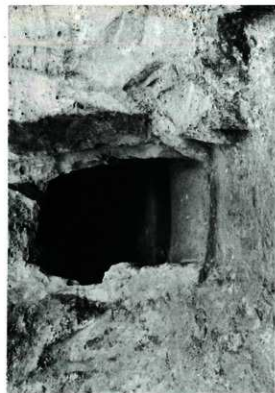
1 伊田狐塚横穴群全景（調査前）



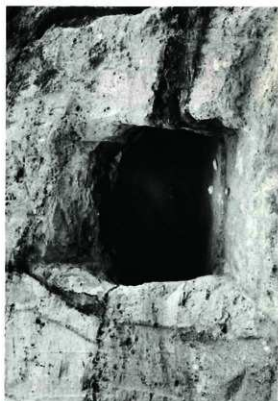
2 狐塚横穴群A～C群全景（調査後）



1



3



2



4

1 B-1号全景 2 B-2号全景

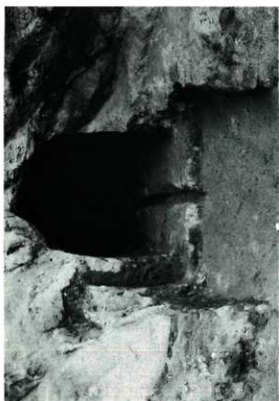
3 B-3号全景 4 B-3号支路工具痕



3



4



1



2

3 B-5号全照 4 C-3号全照

1 B-4号全照 2 C-4号全照



1 伊田狐塚横穴群D群全景



2 D-3～D-7号全景



1



2



3

3 D-1号金銀

图版18



1 D-3号全景



2 D-6号玄室



1 D-4号全景



2 D-5号全景

图版20



1 D-6号全景



2 D-6号玄室

夏吉古墳群・清瀬横穴群・伊田狐塚横穴群

田川市文化財調査報告書 第2集

昭和58年3月31日

発行 田川市教育委員会
社会教育課
田川市千代町6-3

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8-34

